大正十二年五月下浣起筆

小粧房雜載

五

特別
イ4
1919
353

176621

小精廬雜載

大正十二年十月中旬起筆

○因考我邦今日江戸時代の小説類度覧会を南葵文庫の間に催したるに、各時代の童子の小説にて大抵出陳されたり、時代別種類別で出陳されたるは、裏屋や沼華など、一目瞭然たることを得たり、随分性慾露骨のものも多く出陳されたり、西鶴物は二十種ばかり出たり、色物の義者たる事大の事、四国巡礼の図、安田松画屋で、事実や事四国巡礼の図、平生樵夫の扮をしたるる部数七ハメを外にこれを陳列されたり、よ

東京市牛込区市ヶ谷軒町三十番地 嶋鎌吉

38- 9142

くらべて見ると、北の大趣の意義本が甚だ多く見えるに比べ、北の貸本屋の義本は寡大と言へる程度に過ぎない。これは深く考へるべきことである。或る意味に於て大趣本の海外に多く輸出されたのであつたに、貸本屋は合巻を含めてそうした性質のものが印刷されて、中には数枚の絵までも摺み百数頁に及ぶものである。自分は軟文本に過ぎない。北の様式を利用して研究をしたい意味を起こし、おぼろげに感銘を入つて考察したに、自分のあらぬ時代の初期を過ぎ利時代やその前の代を除けば、後前刊本の無つたのを

流行する朝鮮に流布したのを利用して流行本を出した。乃ち江戸時代の初期をいまだ特有の小説がまだ起つてゐない北時代にあたる初期の祈願に関するものが多いから、寿を前にする本を出版した。それは、それを版うして出版したものである。換言すれば前代継承のものであるが、特有の天和貞享の版式、初めて江戸時代特有のものが見出だされ、それを西鶴ものに、今日の旧套を破つたものである。殊にあ性の作品本能を表現あらはしたものであるとも大膽なものである。この一代を風靡した西鶴の流派は其後長く続いた。

自笑や其積りなんとする、北の夷人と共に出掠をい
作をやの比、其の心為を西路と及かうとうとにが者をし
ろ〳〵きくの心いうあり、種々の文人が北の流流
る徴つて心をしに其数もあるとうい、いろ〳〵の類
賛こあるう出比の北の流流この意人びのあり、あ性
の関係を始め世間人情を立常に親を西路と
旧板であつて、全く舞文虚套を脱しに
元こ特徴うあるる、而して其間板の功を西路の
あることを云ふまでもない、廣也前すに於を刊本
を此ことを容易でうとうに為めて、小説の数を
貴族の玩具とする)ことうに、えう書の民
衆の書く読む所とうにのを追こ教正版が北

版の出板こまで刻さる、板
西路よりもを陸奥(かくて刻えし北の西
路よの弟と其流流のこの後世の読本とよく
似に体裁のこのむ、縁を従ひ、文章が主をうして
みる、既と文のを貴族の者てうへことにうろ
に、そこでこんの)を全く文章なる編ることの出来
ろうに、小説も亦其板の出板の新しむことこ
出来る板るうに、所謂る赤本とこ寸珍の絵本
う出をしめに、えんを延寿堂こうを追こと刊行し
んてみる、さるに板を刊行の数ひある、北斎を後
うまでなるけんを詞をかいてある、光角の眼こ
旅くる方ご受けがうにとこ不こうに小説この

はうてうく、大人うち各頁絵入のものが出来て来たれば、
き黒本である、そのもの表紙をつけ、一冊十枚も
あるこのの藩へうち本で三冊乃至五冊で一部を
為すものも多くあつた、その内容も多く当時の史伝
とを出きやうとけたものであつた、浮世絵もこれ等の
ものを進こ進人て来た、こゝに又黒本の次に黄表紙
と称するものが出て来た、体裁は黒本の似たもの
で黄色の表紙をつけたものである、内容
も黒本の真面目を破り大いに面白味をかくとある
ものである、慰み本として黒本の模倣であつた後
あるを始め之れの挿画は黄表紙を覗き行へ
れた、画伯や一九や三馬が多く筆を取つたのもこの部

類の小説である、黄表紙をあんといふものも作りはじめ
進こ後者が進人で来るとコンナ一冊位の内容の後者
へ程度のものを飽き足らぬ感をうあり、一方では憂
敗を進こ進人て来た所のうち、あるものは長くなり敗よ
出てしまひ所謂る読本といふ、大形の冊数の多い
ものが盛んに行はれた、これを後者
挿入てあるが、文章本位のものと此の読本の種
類をいろ〳〵てある、軍談もあれば復讐物語もあ
れば、史料談を載せてあるものもあるし、馬琴の
八犬伝のごとき大部の十の中行はれて、既
往の小説を模倣する位の関の山であつたが、此の
読本を十の為に成るべく改正を加へる位な

ろうに、一方北種の漢文のある本の行はれたるもの、西鶴本
一名コンニヤク本と唱へる小本の赤表紙の流布したこと
も大抵一冊乃至二冊の仕立てのものし、マバラな絵をのせる
けれども文章ばかりのものもあるが、ここに注意すべきは北文
章の方面のものに挿絵を書こんでいること、これは
日本の文学史に特筆すべき一大件である、ハ言ふまで
もなく北の西鶴本の邪宗門内容を風刺本位で、絵
材を狭斜のうき世の世態を穿つてゐる
所に妙味がある、口語体であるゆえ、いろ〳〵無名の
著者が著作を把つてゐるが、注意すべきは
書名を漢土の名のモジツテ多く用いられてゐるも
も漢文の名を用ひ故内容をもるべきでいこん

も亦此類のものに注意すべきものである、北斗七星
名考こゝにつもりもある、江戸も化政頃とそうそう
文藝の花ちらすく盛んを誇し、滑稽本や人情本
が盛んと出て、紙幣を抵抗する紙ニツ切の中本で、遺稿
本なる一九の膝栗毛や三馬の浮世風呂、鯉丈の八笑
人などを始めとして、人情本を枝も葉も深川あ
りの義名ものを本位とするもの、滑稽本を世人
情本も共に口語体であるもの、コンニヤク本と同様で
ある、以上諸種の本は市井に盛んに流布したが、殊に
婦人の間に起つたものが草双紙で
ある、これらのパノラマ式に名所を絵ものを絵つかうして、初出の絵
頭のことき後れの文で飾れの絵の地のあらんかぎり埋めたるに

大体三冊を合ハセて出しれ、こんを或る意味の特色後本
をやとらげれものも云くう、そうく大部のものもある、
種彦ものを北斎双島の作品としも本も成印しくものも
ひ多の田舎源氏のごときも力も流布しくものもある、
あるは北斎のあの彫本とあるこうあつもたくさん
行れ、怪談本とそのものもあるくさいが、一々挙くる
日の遑うるへ、

今者の陳列ひ各種の加版の摺製をそていろ〳〵
感しくことのある、他の摺製者を心つけて見れ
らばと思つれ、摺製をそうの時代の嗜ぬを
あらいし、加版の変遷もあらいし、其の時代〳〵
の流行をあらいし又作者の能力をもそのめの

しみる秘又思ハる、或る高的の流行の言葉う用
みるん、或を流行語を約して也あり、或をナゾの秘
なのもあり、無関の漢語とアテハメタのもあり、ある
とそうて一寸理解のつき難るのもある、或を風
流或を寓関或を教訓北斎をそく
ハ摺製の系図とあるが、後尾ると義務とこの
鏡とう鏡とこ系小数このそくるもの、或る仏名
う命し摺製う其の仏物の成功ろうる形を
説明ひそれくものあり、たるくるる人耳の成就
しそみるもそれう或る形を繰りうこそれそみるの
もある、振仮名をつけるけれバ後みを面白るもの
や、芝居の墨帖の如き名やお差番別ひあるが

徳川以前の極めて簡素のものであるが、後世に
つて標題を整理する結果を誤みうるに解し難き
様なるべし、今厳密に供しこれ也目の内のうるおし
く挙げて置くこと
後世に対する理解のつき易き標題の内さきたの
様なるものある
一野伏弥蔵
一伏城野鮮淡
一巻伏時立顔
一野白内隆繼
北斗を多く男色と女色帯の四書ひあるも、縣
ハ野部の伏時を伏城の伏ひあるも、白さまの人

巻を巻屋を作すものひあるべし。時立顔をひがり
とよんでいることもある方言ひあるべして、
漢語を割り込むで書名とせしあるを頗る多く
ある、振仮名ばかりけんべ内の人も誤り易きなれ
ひあるべし、左の如きうんひある
一畫用市二分狂言
一直淡見甚義
一敵討記平
一莫切自根金生木
一笑席衿裂米
アテ字を使つて居るものを最も多くあるべ、その
内

一　甲子夜話後編

一　巨意把思（アイガリシ）

一　老横志

一　真女意（シンニョイ）　逆神の墓を示す

一　許都美（ツビ）

一　出世握席物語

此内ニ訓ウツリシモノ多ク中ニ口語体ニ
ヨル位ナル、
コンニヤク本ニ前ニ示シタ通リ中ニ口語体デ
アルノハ標題ニ即シテ漢籍ノ名ヲモジリ
ワザトモノガ甚ダ多ク、内容ト調ハレヲ久クシ
テ見ルベキ俳し漢学者ヲ罵倒スル皮
肉ノ言ヲ以テ富ミタリ見ルベキモノアルト見ルベキ

ヒアラウ、カヲ掲ゲタモノハコンニヤク本以
外ノモノイクラカ交ツテアルガ八分通リハコンニ
ヤクノ名ヒアル

一　故契三唱　一　廓西（ガ）話子
一　契図策　一　巨慶三笑
一　通神孔雀三数色　一　格子戦話
一　起承転合　一　文選以生
一　酒徒雅　一　三體志
一　記原情伝　一　和唐珠解
一　舶頭深伝　一　南品俗語
一　舶宝笑伝

此外ニ本ヲ騙睡笑ヲモアル、当時ノ漢
学ノ隆盛時代ヒアラウ、漢学ノモ

じりも理解さんなと見くる、たとえを題後撰会
をとてすると、何んのるこう漢詩をかるものひろみ
んハ解しるのあることをうつに 醒世恒言や本
朝酔菩提や、 拾毛氷刻衣 ものも此部類ハ尾
す（きことのあるる （ねるなる 東海探語）
風流の冠詞のあるものをんを解るるくあるこ、
るの所謂る風流とハ艶艶集のあることもあらいす
ものんある、

一風流記 十七号 平家
一風流友三味線
一風流今様家
一風流都の花（ふ）

一風流吳竹男
一風流面三味線
一風流酒吸龍
一風流五現香

一風流祇園祭
一風流加賀花

一風流夢浮橋

寛闊の冠詞あるる名例へハ寛闊平家物語
るるこうるものもいくらもあるこんも矢張つや
ものひあるる好色とあるふる銘を打つたるも
好色本として一数を為するるるく、閨房
の秘るを表保さ書のいたるものひ大抵ひ艶
の枕本ものもるるるく、一々挙るる暇るいる
ど浮世あるる、北枝のるるを待て時の行政府
ら禁敗を喰つたこともあるるるの法網を潜
んとて教訓の二字を戴くことこの行いんと、
北の教訓るいろ〳〵ある事戯教諭とるる

有り戦刊と云ふものあり底刊と云ふ得秘書
数刊と云ふ如きものあり、全部が猥褻の文
にわたるものが多くは数刊本位なりしことも戦
の字を附帯してゐるのみを推し得るべく、兎角
此の割注のある文章あるいは伏字し
てゐる、某と熟語と云ふ書名を、文字屋一派
のものの作りなるべく且つ何人も知りてゐるこの一
々挙くるも及ばざるべし、書名とは春の海とこの云
ふ秘本も出れば春画の五りんでもあることも
測るべきなり、

新聞記事切抜分類表

大阪毎日新聞社圖書室

新聞記事切抜分類表

（臨時に附加すべき事件名又は問題名項目は大體省略することゝした）

一、世界

世界形勢諸般
政治軍事、經濟產業、勞働社會、宗教教育

國際的諸會議
聯盟會議、勞働會議、海員勞働會議、農業會議、貿易會議、通信會議、經濟會議、ヘーグ會議、セノア會議、ローザンヌ會議、其他

國際間諸問題
近東問題、歐洲復興問題、對過激派問題、獨逸賠償問題、米國對歐債權問題其他

條約協定
國際聯盟規約

二、各國

（それ〴〵政治軍事、經濟產業、勞働社會、宗教教育の四項に分つ）

A 亞米利加合衆國
布哇、比律賓

B 英國
愛蘭、濠洲、加奈陀、印度、埃及、南阿

B 白耳義

B バルチック諸國
波蘭、リトアニア、エストニア、芬蘭、其他

C 支那
滿洲、蒙古、西藏、青海

D ダニューブ諸國
墺太利、匈牙利、チエツコ・スロバキア、ユーゴースラブ、羅馬尼、勃牙利、其他

F 佛蘭西

G 獨逸

G 希臘

H 和蘭

I 伊太利

M 墨西哥
羅馬法王廳

N 諾威

P 葡萄牙

P 波斯

R 露西亞
歐露、西伯利

S 南米諸國
伯剌西爾、智利、祕露其他

S 暹羅

S 西班牙

S 瑞西

S 瑞典

T 土耳其

條約協定

三、日本

土地人口、結婚離婚、出生死亡、天文氣象、其他

四、皇室

宮廷、祭祀、宮內省、內大臣府、樞密院、位階勳章、恩給褒章

五、行政

中央行政
政治運動、政局、內閣、外務省
內務省、大藏省、文部省、農商務省、遞信省、鐵道省、社會局
拓植局、其他

地方行政
大阪市政、大阪府政、京都府市
兵庫縣市、東京府市、其他縣市
都市問題、自治問題

道廳及總督府
北海道、樺太、朝鮮、臺灣、關東州、南洋

官吏
調査會、其他

六、外交

條約協定
對支、對露、對米、對英、對獨
對佛、本邦駐紮外交團、其他

七、議會

兩院關係
議案、豫決算

貴族院
議事、各派關係、研究會、幸倶樂部、選擧、其他

衆議院
議事、各派關係、政友會、憲政會、革新倶樂部、庚申倶樂部、選擧、其他

八、軍事

國防
極東派遣外國軍事

陸軍
編成、兵營、兵器、軍需、演習
教育、風紀

海軍
鎭守府要港部、艦船及艦隊、演習、教育、風紀

徵兵

九、司法

新法令、司法行政、裁判所檢事局、刑事裁判、民事裁判、辯護士、少年審判所、刑務所、免囚保護
警察行政

一〇、財政

財政政策、中央財政、地方財政、租稅、地方稅、公營專賣

一一、經濟

各地經濟事情
東京、大阪、其他內地、植民地
南洋

企業
會社、合同聯合、經營會計、破綻、恐慌不景氣

貨幣及金融
證券、公債、資金、銀行、農業
貨幣及兌換銀行券、手形、有價
金融及其機關、工業金融及其機關
信託貯蓄銀行、郵便爲替貯金、
無盡貿屋、各地金融市場

一二、商業

卸賣、小賣

貿易
日本對外貿易、日支貿易、日米貿易、日本植民地貿易

市場
株式、米穀、綿糸、生糸、其他

取引所

物價

倉庫

稅關

保險
海上、火災、生命、社會、其他

度量衡、商品檢査

商業會議所、商品陳列所

一三、交通

道路、自動車、鐵道、電車
陸上運賃、海上運賃、海運、河川港灣、運送配達

通信
郵便、電信、電話、無電、其他

一四、產業

農業、林業、水產業、畜產業、鑛業

工業
B紡績工業（絹、綿、麻）、D電氣工業、G瓦斯工業、顏料及塗料工業、H醱酵工業、皮革工業、花莚眞田業、K化學工業、金屬品工業、機械工業、建築業、M燐寸製造業、N燃料、S製糖業製粉業、漆器業、窯業、染色織物業、染料工業、製鐵製銅業、製紙業、出版印刷業、T陶磁器製造業、Y油脂工業、藥品工業Z造船業、雜工業

產業組合、同業組合、博覽會、共進會

一五、勞働

勞働爭議、保護救濟、就業失業、賃銀待遇、勞働組合運動、小作爭議、俸給生活者、細民生活者

一六、會及團體

對外、軍事、經濟、產業勞働、社會事業、社會運動、宗教、教育、社交、運動、藝術、婦人、諸集會

一七、社會

B文化生活、病疫、爆發崩壞、F不良少年少女、風水雪落雷、不穩行動

F婦人家庭
育兒、家政、料理、手藝、其他

G儀式祭典、僞造贋造、強盜竊盜、H發掘拾得、破獄脫走、祕密結社、I家出失踪、J慈善公益、自殺情死、K火災震災、拐帶詐欺横領、喧嘩鬪爭過失死傷、M密輸密航、R縊死溺死、S殺人傷害棄兒迷兒、鮮人問題、表彰頌德

S社會施設
救助救療、職業紹介所、住宅宿泊所、市場食堂、授產殖資、兒童保護、矯風隣保、部落改善、其他

S社會衛生
上水道、下水道、公園運動場、防疫施設、病院避病院、飲食物檢査、樂養物研究、禁酒及禁煙

S植民、移民
北米、布哇、墨西哥、南阿、滿州、西伯利、濠洲、臺灣、南洋、北海道、樺太、朝鮮、其他

S食料問題、S襲擊强迫

S宣傳運動、T賭博、W猥褻行爲、Y誘拐隱匿、Y遊廓藝娼妓、Z贈賄收賄

一八、宗教

宗教行政、神道各派、佛教各派、基督教各派、迷信、其他

一九、教育

教育行政、地方教育行政
大阪教育行政、學士院、學術研究所、大學、高等學校、專門學校、師範學校、實業學校、中學校、女子大學、女子專門學校
女學校、小學校、補習學校、幼稚園、特殊學校、學校衛生、植民地教育、青少年團、處女會、圖書館及博物館、出版及印刷
思想學說、發明發見

二〇、藝術

文藝、美術（繪畫、彫刻、寫眞）、國寶、音樂（和洋）歌劇舞踊、能樂（東京、大阪）
演劇（東京、大阪）活動寫眞、寄席興行物、其他

二一、娛樂

流行、玩具、蓄音機、圍碁、將棋、茶、生花、香骨董、園藝、釣魚、銃獵其他

二二、運動

Fフートボール、Gゴルフ、Hホッケー、J乘馬柔術、K劍術、拳闘、Oオリムピック（世界、極東）R陸上競技、S漕艇、水泳、スキー、S相模（東京大阪）、T庭球、Y野球、U運動會

二三、航空

航空行政、航空隊（陸軍海軍）民間飛行界、外國飛行界、航空機製作所

二四、人物

日本人
皇族、男、女

支那人
男、女

歐米人
男、女

死者、移動、往來、渡航來朝、冠婚葬祭、名士談話

二五、別項

社說、寄稿、統計資料、連載記事、本社主催後援記事、新聞研究

附言

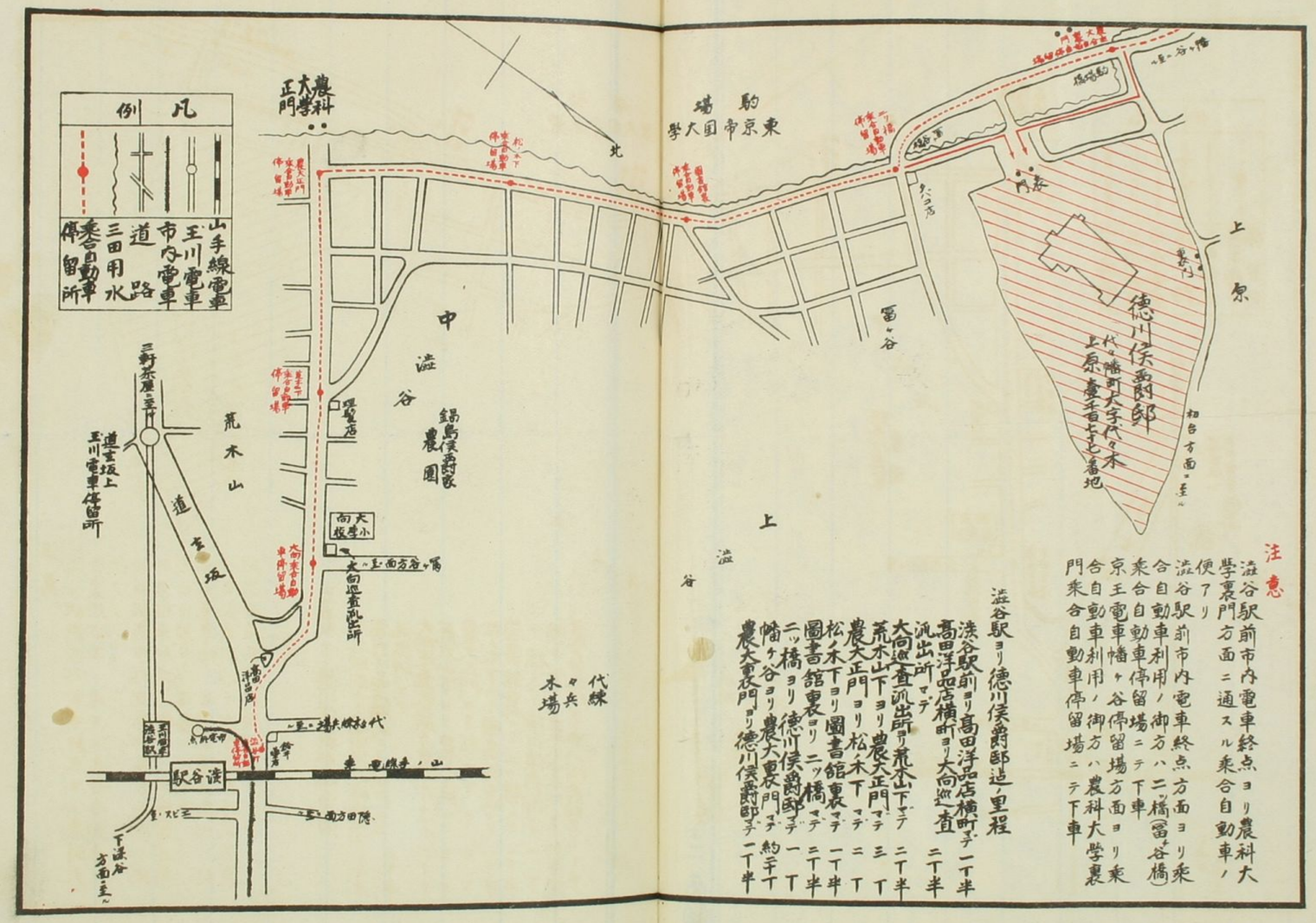
圖書室における新聞記事の切抜整理は大正九年「毎日年鑑」の創刊に際し、その材料を供給する必要上から實行したのに始まる。以來四年間本紙を中心に朝日及時事の記事を以て補遺し、專ら各年度の年鑑編纂に資し時に又編輯局からの需要にも應じてゐた。十二年度からは切抜通信社よりの日々の材料をも附加し、三月十五日からは地方版全部の記事をも網羅して試みることになつた。

元來新聞記事の抜萃整理といふことは、一八六九年市俄古において「モルグー」と稱して試みられたのが最初で、一八八〇年巴里ではクリッピング●ビューローが創設され大きな刺戟となつた。紐育では一八九六年「クリッピング●コレクター」といふ月刊雜誌まで發刊された。爾後アップツーデートの唯一資料として、新聞記事の切抜整理事業は年と共に發達し、最早今日においては政治實業の諸機關にして斯業の完全を期してゐない所は無く、全米の進歩的圖書館にして之を行はざる所は殆ど無い有樣である。新聞社では例のウォールド社の パイオグラフィカル●デパートメントの如き、その代表的の一つであらう。由來この仕事の最も困難とする點は、先づ適切な分類の基準を樹てるにあるので、圖書の分類表を以て劃一せんとすると否とは彼地の專門家間の討議の一區目になつてゐる。また新聞社に於る現在行はれてゐる斯業に就いて觀ても、大體セオレチカル●アレンヂメントとも言ふべき倫敦タイムス流の分類法と純粋なサブセクトをアルフハベチカルに排列する紐育のウォールド式の行方との二つがある。

左に示した本社圖書室における分類表は、四ヶ年間の實驗に鑑み略その成案を得た結果で、分類法としての根本の立場は前二者の調和であると或る意味で言へる。即ち大體においては成るべく理論的に分類し、外國國名並に社會事項の加く煩瑣にして數の多い部分に對しては、羅馬字順を以て排列したが如きである。

○四日終期会は三十年紀念の大会なるを以て、この三つの
ことは全く会員の二名以上の出席にて、
例のごとく挙行されたり、三十年紀念と云ふことは
自分の主唱にて、なるべく、なるべく自ら
為すことを欲せず、自業自得である、仁者は海浜者
集を思ひ立つたのである、紀念のみの三十年間の募
ことを西義さんに、会員募集を勧めらる
してさう〳〵紀集でさうした、曾て会員さうし
やその前後問断なく会員に勧誘を
過めたれど、他の四三名と感謝状を受けたお
る和田と自分とを統合の決議に名誉会員

に推されたれ、これ会員に於ても名誉のものとなつてゐる、
えら名誉会員となつてゐるものは徳川伯爵の三
四あるが、なるべく深い意義うして推薦され
たのは此称号を得ることは許さぬことなつてゐる、
三十年の努力で贏ち得たものは一枚の紙なるも
のは、なるべくこれを勲章にもある名
誉会員は大抵隠退の侯爵に推すの例なり、余等
者人に勧しても保件うちある、隠退せずに更なる一
層努力せんとこれまで、隠退せずに迷惑のるものあるが
に隠退するわど奏して居らず、若者の募集に
就て誰かうれも余ひとりは成功せぬと多くの会員
員の口々に言ふてゐる、自分は早稲田の募集に



注意

澁谷駅前市内電車終点ヨリ農科大學裏門方面ニ通スル乗合自動車ノ便アリ

澁谷駅前市内電車終点方面ヨリ乗合自動車利用ノ御方ハ二ッ橋(冨ヶ谷橋)乗合自動車停留場ニテ下車

京王電車幡ヶ谷停留場方面ヨリ乗合自動車利用ノ御方ハ農科大學裏門乗合自動車停留場ニテ下車

澁谷駅ヨリ徳川侯爵邸迄ノ里程

澁谷駅前ヨリ高田洋品店横町マデ　二丁半
高田洋品店横町ヨリ大向巡査出所マデ　二丁半
大向巡査出所ヨリ荒木山下マデ　二丁半
荒木山下ヨリ農大正門マデ　三丁
農大正門ヨリ松ノ木下マデ　二丁
松ノ木下ヨリ圖書館裏マデ　一丁半
圖書館裏ヨリ二ッ橋マデ　二丁半
二ッ橋ヨリ徳川侯爵邸マデ　一丁
幡ヶ谷ヨリ農大裏門マデ　約三丁
農大裏門ヨリ徳川侯爵邸マデ　一丁半

まゝ此地を其儘にし、北谷の墓を二人合力を以て
必ず移さんとの事、ありとそこの岸辺ら移し終る
の面目も立ぬ困りたる也　　十月廿一日の記

北紀念会と称せる園遊会を代々木の新邸に
催さんに、自分も郊外地に出来たるを向けること
う勧めて、電車にて渋谷にて車しることも
初めてなる、乗合自動車も代々木迄(五銭)そ
なるが、自分も俥を傾け中渋谷の鍋島侯
爵家不有地を横断して代々木に到つて、鍋島
家の土地を十萬坪もあつて三年前まで
く畑地であつたとこゝが今は立派な住宅地とな
つて殖人を出地を入るまで何ぞの人家の建

て別れらるゝのを以て一番を要して、徳川侯
邸の新邸を別紙の図のごとく、高台の向
しと云ふ住地なる、今より廿年前久米氏と
助の経営した所也、ある、お母さん建物多
高らい庭園もあり給仕数二百三十を以て
すと云ふ侯爵を義と新宅を麻布の邸
を貴印して美と印稲荷とか云ふと寝
室を七畳敷中ひある、侯爵の地の図を静
和園とそれつけ、園内の景を三十六撰ひ三十六
勝日ごとくのれるのある、ちゝ西もろい地形
であるが、之後の手入を容易でもろい様なる
けれど、庭の仕方を古内省式とも云へべきに

今宮内省に奉仕するものが久米時代に二度しか見
えず、庭の一隅部にもそれ香木の芝らず、本性要
う庭の大きな割合に屋根の住るきそ引立役
大限度の早稲田のせ愛や自分宗家の本性要
そ何の屋根を高くしうるを和面に庭もし
ばかり久米のこりき成生をの芝に用意の偏いも
ろうあ、遠さこんも改造を要するもあろう、園中
の四季の芽度ういろ〳〵設けられんもみる、皆の
の住地うよく選人である、こんを侯爵自家
の庭を成のとものと言う、京都園の別邸をあ
るこのと略に、同式であるこ侯の愛好の非常を深
別する所丈も改に何ものも足きを出来てみる此志

うに陶器をあるのを拾ふ十の七八を占めてみる此
処の幸に時めく園游の場所あつ
に、赤改の校書が一隊あるいて新緑の樹
下に輪旋したのを自分も田舎の人々何等
りの地点であると感じに、野路の陽光も四囲
人の見惚れて何の無
美人無バ興味赤ル感ちを不ル覚ル此
流れこぬうちと一吳し
此の園游の客内省の御清を為つうる
ち山に登し所も御
樹木を美護せんとする樹下の義を拂
つてをるうあと力説してみる、又京都の乙

訓郡の筍堀りこと語り移りて山々の日数
淡長くして地郡内にて筍の
培養法を研究され、肥料を施し土壌を
常に休養を盛んに上うつ又ときは
枝のことくなりてみる、そこで地中なる筍の
おのの大きさを生長するに
なる上目土を亀裂を生ずる、その亀裂を目
あるを堀り出すのあるとなり、依しこの亀裂
を目当てにするのであるけれども一寸の
のものであるそうな、いつもや京都を過んとの時
筍を堀ることを思ふの道の百姓の特者の芸
びるを見て驚くことをいとやう

へて時々普通牛の糞の堆積してある下を
堀ることを思ひてもの地下のことのあるの
と評つたが、今ではもう地上を産一ツ無い
枝の長の配をタキ、差くに枝の横さまにして
亀裂の見える用を言うあると知り始めて不
審う始めて、地の堀巻りする毎年しお南の
肥料交りに土を加くるこう流れ追々土地の高まる
傾向を免うれぬ、それも実年日々こう堀返しして
旧土を去り、土を入れうくさと云ふてみる、前年の
皇太子おねぎの時山口を廉従して実地の目
撃談てある
舊文五月十九日付七月廿七日
五月廿五日録
舊文未公ハしに、元川の話を

徹所徹底魚類のうちにたくさんある以、要求利加
なる一種の鱒の卵を元亨丸等培養の苦
心してみるとあきらかに云ふ、自人を敵の半
分の日本を彼国の魚を移植する彼等の如
く吝うるものにあらず、何人も一歩を進め日本
の魚卵を交換的に米国に送り、その要求を
企図せざるとふと、五月川の云ふを、そのうち米
国にも鮎を珍重するも彼地なるし、そこで前
年自分らの送つたことのある、船員の不注意
で一切ひを腐敗せしめたが更らに又試みてある
ものを成功すべしと例し消毒で充きうる法
りせず、目命をえんとせざるべき義なるの魚類の交

換移植を米人の望まる一種の謎である、恐らく
彼等と長き地謎を解くの期あらんと一笑す
○早稲田の学生野動を新作品を維持
実行法室の前日の新世界を
を決せしめ等行の為を熱望つて、まず研
究を学生の注意さるべき問題に時自人のところ
きやと事を比べるあちこち注意を無く以後
終こ誤解の種とならんとの多数の物校の学
校さのり来つたことやら、難しい立場をなるを学生
のやうもとこともの何んと考へても不用意校さの
とと思ふ、きなるを及ばずして研究問題

軍閥憎惡の反感から

學生軍事研究團の發團式に

自由を叫ぶ主義者連　猛彌次飛ばして言論壓迫

叱咤する塩澤昌貞博士

社會一般の耳目を集中したる早稲田大學學生軍事研究團の發團式は去る十日午後三時から大學大講堂に於て擧行されたが開會前既に學園の内外、一種異樣なる雰圍氣は漲つて科止門或は塀等へ一軍閥と終始闘へる故總長を憶へ！とか「軍閥を倒せ！會場を占領せよ。軍閥の走狗を葬れ！一等と大書された立看板やビラは反軍事研究團同盟の名によつて撒げられ何事か出來せずんば止まざるの暗示を與へて居たが、果然遂に開會せらるるや會場内の諸所に紛れ居たる急進主義者奉ずる一部の徒即ち所謂反軍事研究團同盟なるものの連中によつて低級なる罵詈は放たれ、宣誓式とか訓示とかの大袈裟なる擧式は益々是等一部の反感を買ひ嘲笑に　屬囂々たる鋼次は飛んで團長の訓示も殆ど聲の叫びに封じられ講堂の神聖は極度に汚され未曾有の大混亂を生ず案内をつくるに至つた。

定刻前　來賓として陸軍

側より、白川次官、中島兵衛、石光第一の兩師團長、堀内中將、騎兵科教官小島少佐、砲兵科教官本越少佐、海軍側より海軍省教育局長古川少將、一命參謀田中佐等二十數名參會し、講堂内は黄菊の造花等をつけた七十名の團員と一般學生によつて埋まつた。

かくて　定刻三時を過ぎ約十分鐘聲の如き拍子の中に高田、鹽澤の一博士に、來賓の紹介あり、團長菅柳團長壇上に現る、

やがて會場は騷擾を初めた。鋼次の咆哮を他所に國歌の宣誓文朗讀終り、團長菅團の趣旨を述べんとして

「私は」　と一語を發すれば「軍國主義者である」と酬ひ、「塩は」と一語、喧騒の舞臺と化した。「青柳先を知れ」「軍閥に早稲田を賣る馬鹿者」と聞くに耐えざる罵詈が床を踏み机を叩いて續出す。教授は信服せず「自由と規律は矛盾する」と。規律ある自由が眞の理由なり。

（學生四十年）

自由を　標榜して來た早稲田學園に規律ある國民の造就に資するを以て目的とす叫び「世界戰後歐米列國はインターナショナリズム高調せらるゝと雖も一方國家主義が然えつゝあるではないか、然しながら國家主義と軍國主義とは別ものである。云ふまでもなく軍國主義は排斥しなければならぬが

國家主義　者たること

に於て、苟も一隻眼を有する限り閥して此の覺悟を動かさず」と。教授は高論を繼いで「軍隊の民衆化とは軍隊の解放と改造とを意味す」と述べて降壇したが場内の喧騒は依然として鎮まらない。

軍閥今尚ありとせば

か、研究團に破られる

彌次を壓する

高田博士の大熱辯

次て鹽澤博士は温厚に内心の怒りを秘めて「諸君の中に誤解してゐる者がある」と開口一番すれば鋼次陣は一擊に「誤解も何もあるものか」と野次を浴びせる。「軍閥と國防は別問題だ、他人の自由を妨げる諸君の意志には諒解出來ない」と叱咤する。

續いて高田博士登壇するや、後方から「明治十六年を忘れるな」「故侯の意志を裏切るな」と云ふものあり。博士は更に動ぜず「吾人は立憲政體の下に言論の自由、集會の自由を得てゐる本校の學生である」と鋼次を壓し「國民がすこしでも軍事の智識を有することは國防上これ程安全なことはない軍隊の民衆化こそ故侯の遺志ではないか。閥は何閥もよくない、軍閥今尚ありとすればこの研究團によつて破られて行くのだ」と說き最後に「早稲田一萬の學徒は各自自由の研究に志すべきだ、我輩はこの研究團に贊成するから出席したのだ。何故反對者は連袂に退場しない。諸君の態度は早大の恥だ」と壓をふるはせて一喝、手痛い所に突き込んで鋼次を一蹴した。

行とうる早稲田大學新聞
大月廿一日記

他校の學生も數名潜み

下劣な彌次盛に飛ばさる

かくて彌次も一時暴言を慎めたが來賓の白川陸軍次官閣相の代理として登壇、祝辭朗讀をやれば彌次逆叉羅起となつて妨害を試み、「あゝ一將功なつて萬骨枯るだ」「君の勳章からは國民の血が流れて居るぞッ！」等の彌次を飛ばし石光第一師團長の祝辭演說も

海軍省 教育局長古川少將の演說も皆悉く狂暴化せる彌次の爲に封ぜられて三軍を叱咤指揮せる諸將軍の大聲も殆ど聞きとれず、軍令部參謀長田中佐が最後に壇上に起つた時は一彌次漢、群衆心理にて巧に他を雷同せしめんとして校歌「都の西北」を大擂にも唱ひ出し二三の彌次亦是れに和したが一學生が

「早稲田 の校歌は夫れ程安いものではないぞ」と默れッ！」と一喝に屏息したが其の狂暴なる彌次振りは實に言語に絶してゐた。殊に茲に見逃し難い事實のあつたは彼等彌次漢の中に帝大その他他校の制服を着せる學生の數名潜み居りて盛に暴言、彌次を飛ばした者のあること、甚だしきは高田、澤の

一二博士 を指し示して聽衆に堪へない惡口を吐いた者のあることであつた。

かくてあらん限りの喧騒、暴言の間に社の寫眞班のマグネシユームの煙の中に一種凄壯な氣を漲らせつゝ午後四時半茂木副團長の簡單なる閉會の辭によつて散會は宣せられ來賓を先發に退場したる團員一同は直に大隊會議の茶話會に臨んだが茲は亦至くの別天地、初夏の

新緑は 滴るばかりの長閑團員は來賓と共に記念撮影の上、解散、今夕は各新聞式の終るや否や直に壇上に馳せ上りて反對演說に氣勢を揚げたが茲に於て會場は全くその態反軍事研究團の意の儘となつた壇上に起つた稲村某は「吾人は小さき五六十人の研究團は敢て恐れざるも彼等は軍閥の走狗となつて軍閥最後の餘命を維持する爲めに使はれて居るのだ、故に彼等は少き集まりだとは云へその背後には大なる力が潜んでゐる、吾人は此の背後の大なる力を破壞する前に先づ小なりと雖も此の軍研團より撲滅せねばならぬ」と叫び激越の調を以て卓を擊ち斯くして伊藤某を始め其の他數名立ち代り熱辯を振つたが、

聽衆の 可者「決議文を作製せよ」と云ふものあり某學生を座長にして決議すべしと叫ぶ者もあつたが果は「故總長の銅像前へ前へ」とドカ〳〵と好奇心に駆らるる百餘名銅像をも加へて二三百名中央校庭に押かけ茲に於ても激論が飛んだが結局明十一日學生大會を開いて大々的撲滅を謀ることを申し合せ五時過る頃遂に去つた

軍研團を葬れと

反對派の第一聲

なし當日綾團式の當初より其の光景を撮影した軍事寫眞班の會技師の活動のフキルム中の人ともなつて、後同會館の大廣間に於て紅茶、咽喉を潤しながら今日の感慨を繁笑の裡に五時十分散會した。

暴漢の亂入もあり

大混亂大亂鬪の學生大會

此の責めは誰れが負ふ

蹂躙された言論の自由

[illegible]

軍閥の 吾が早大にも其の勢力維持の爲めに侵入して來たと述べ且つ吾國のミリタリズムの侵略的罪惡史を詳說し軍閥を散々攻擊して後宣言並に左記の決議文を朗讀した。

決議文

吾は軍國主義に反對し早稲田大學をして軍閥宣傳の具たらしむることに反對す

而して緯士は多數學生の贊同を求め直に實行委員をして安達稲村戸叶の三君を擧げ

具體的 の運動に着手する事を聲明して拍手裡に降壇すれ

反軍國 稲田大學の學生は軍國主義に反對し軍閥の横暴を排撃す

角力部 角力部は今日の大會代表に反對し左の決議を行ふ

群衆等 群衆等は軍閥反感を起し中には「緯士大會と僞つて人を集め緯士大會の廣告か」と次る者があつて騒然としたので安達君結局「贊成者のみに演說を許可する」と云へば「何が許可だ我々學生の意志を無視するな」と彌次られ會場はゴツタ返した。

この混亂の中より排撃同盟の一員は壇上に現はれ學校當局が軍研團にのみ厚いことを叫んだが彌次

斯く形勢險惡の裡に時間は過ぎ校庭に集まれる學生の數は四千を越え「司會者は何をして居る！早くやれッ」などの聲騒に起る

正午十分前先鋒塩田手の中に緯士會幹事安達君故總長銅像前に立つて開會を宣し「早稲田大學が軍國主義化せんとするは吾人の默視する能はざる所」と述べ續いて同會幹事淺沼君叉「國家の苦しみにモガク

軍閥が 吾が早大にも其の勢力維持の爲めに侵入して來たと述べ且つ吾國のミリタリズムの侵略的罪惡史を詳說し軍閥を散々攻擊して後宣言並に左記の決議文を朗讀した。

決議文

吾は軍國主義に反對し早稲田大學をして軍閥宣傳の具たらしむることに反對す

而して緯士は多數學生の贊同を求め直に實行委員をして安達稲村戸叶の三君を擧げ

具體的 の運動に着手する事を聲明して拍手裡に降壇すれば之の時突如「異議」ありと叫んで群衆中に立ち上つた。學生は默は討論の會場を混亂せしむる恐れあるを以て急據司會者に解散を命じたので安達君は再び壇上に登り「今日は是にて閉會す」と散會を宣すれば學生連承知せず「始めと意味が違ふぞ續けろ」と叫んで全く騒に陷り會場は益混亂せんとした茲に於て安達君叉壇上に現はれ「今日は學校當局が讀行を許さゞれば此の軍研團問題に就き聞き度き人は午後二時よりの緯士大會へ來られ度し」と述べし爲め

我々を欺くか

彌次は飛んで

大會漸々喧騒

我々學生の意志を無視するな」と彌次られ會場はゴツタ返した。

この混亂の中より排撃同盟の一員は壇上に現はれ學校當局が軍研團にのみ厚いことを叫んだが彌次

亂鬪の幕は落され
鐵拳飛び棍棒舞ふ
大修羅場現出す
亂入せる從横倶樂部員

かくて怒號罵倒は騷然として渦巻いて居る中を文化同盟の戸叶君突然立つて壇上に現はれ「私はかくと見た雄辯會側の淺沼君等は是れを救はんとして進み出で兹に兩者の大格鬪を演出し而部其他を亂打された淺沼君は遂に群衆の中に呑まれつゝ姿を消し壇上は全く柔道部相撲部等の一部有志のものに占領され彼等は又口々に「早くを出せ」と叫號した。この時森崎君憤慨し他人の制止をも聞かず壇上に飛び出し「暴力を用ふるとは何事ぞ」と叫ぶや折柴場内に突入せる下戸塚の縱横倶樂部員柏木佐々城等の一團が現れ「夫れ計會主義者だ。殴れ」と怒號しつゝ森崎君を引きづり落し其まゝ居合す神田、仙波十數名の應援團連中と共に散々殴打した。

暴力者

撲部の猛者某々等と共に袋叩きに遂に赤に染つて嗚れた。し戸叶は遂に赤に染つて嗚れた。かくと見た雄辯會側の淺沼君等是

かくてステッキ、下駄は其の他彼等に飛んで殴る殴るの一大修羅場を現出し

神聖な

る故總長銅像の前も兇暴なる腕力の爲めに汚されて亂鬪は數回繰返され學生課事務員本會幹事等總出の仲裁制止も何等効なく只成り行きに任すの外なくなつた。かくて此の暴漢等が跋扈を逞うせる中「早稲田學園の爲に」

言論自由

のために」等と云つて中立者壇上に起つて演説せんとするも激し切つた荒武者や暴漢等はもう誰彼れの區別なく殴り散らし散々狂暴の限りをつくし群衆の學生口々に腕力は横暴だ」「暴漢を殴り返せ」と憤慨して悲痛なる叫びを発ぐれば壇上の佐々城某棍棒を振りかざして「何を生意氣な」「文句があれば腕で來い」と暴言を吐きつゝ聽衆の中に突進し逃ぐるを追ひて亂打するその中學生課員等は壇上に在る學生を全部引き下ろし聽衆に向つて解散〳〵と連呼して注意を與へたが其の時雄辯會の幹事林君突如壇上に起ち「今日の會合は吾學園を

軍閥の手

先になさしめな いために開いたものである」と云ふて種々理由を述べんとしたが佐々城某又現れて「然らば此の前の發團式に何故舞次つた到底せ よ」と叫びつゝ迫る。折柴突然鐵拳の裏に隠れゐたる一怪漢は頭から

黑マント

を冠つて飛び出し後に廻つて矢庭に林君の左顳を下駄にて殴打し飛び降りて尚も群衆中を暴れ、當ろを幸殴りつけつゝ慰賜館方面へ突進せば學生連働者側に於ては種々協議の結果十五日午後五時學生大會有志の名に於て彼れを殴れ」と後を追ふた。此て遂に左の如き質問書を學生當局

漸々解散

かくて混亂の狀態は持續したが主働者側は全く姿を見せざるに至つたが群衆はワイ〳〵騒いで何時迄も解散せざるので學生課員を助けて爭亂の制止に努めつゝあつた我が早稲田大學新聞の平賀俊雄君は學生課員とも相談の上局外者として壇上に起ち聽衆に解散を勧め群衆又各其れを諒し口々に暴漢の亂暴を鳴らしながら三々五々漸々退散した。時に一時三十分、尚當日午後二時より大講堂に於て働さる新入生歓迎の雄辯大會は學生大會の紛擾に依つて萬一の事あるを恐れ遂に無期延期となつた。

雄辯會
學校當局へ
質問書を呈出す

暴力を以て會場を蹂躙された主働者側に於ては種々協議の結果十五日午後五時學生大會有志の名に於て遂に左の如き質問書を學生當局に提出しその解答を求めた、その要旨左の如し

一、研究團に關する五項は其の解散に依り格別必要なく且つ紙面の都合もあれば省略編輯者

一、學生課が學生大會を妨害するかの如き態度に出で當日暴行の計畫を予知し乍らこを制止しなかつたのは何故か

一、暴行を働いた學生及壯士の處分如何

一、我々は暴力を以て言論の自由を妨害せんとする體育部には今後體育費を扨ゐるを好まず費見如何

一、學生大會に參加したる各團體の集會を禁止したる理由如何又暴行を被りたる者の意志表示の對策・問ふ

一、その外暴行者を後援したる疑ひある二三教授にそ責任を問ひ當局のそれに對する態度を質問した

紛叫を生んだ
軍研團遂に解散す
見上げた團員の母校愛
暴言暴行者自決せよ

開くに堪へざる罵詈を浴せ掛けられても最後迄微動だもしなかつた十二日の學生大會には恰も乘馬練習の常例日で白黑の騎兵一隊隊に行き全然あの渦中には捲込まれず濟んだがその後この問題は動く擔大なるばかりで全學生をして不安の念に陷らしめるに至つた、元來の創立主旨

軍事研究團

動機に就ては何人にも指をさゝれることは毛頭ないと思ふが只發團式の形式に就ては吾々の思慮の及ばなかつた點に於て深く責任を感じてゐる、元より良い動機より出發してゐるとは云へ母校の平和秩序を少しでも擾す事實を見ては到底忍ぶに堪えない、玆に團員最後の決心を固め飽迄

紳士的の態

度を以て終始する見地の下に凡ゆる感情や行掛りを捨て涙を呑んで自發的に此の研究團を判然解散することにした、併し吾々の研究は獨り騎兵や野砲兵の練習ばかりで無く防の

節々の洋裝は
早大裏門通り上
シーケー洋服店へ

る我研究團員七十名は最初より規律を重じ去る十日の團式に於て

○醉後小録抄則　五月廿二日記

一庭園の樹葉や樹枝の枯れたるの氣ある
てある摘み取つたハサミを入れたりする
れう堆を為ちは寫真と入れて湯をそゝ
洗濯の用に供する、薪は山と柴を刈り
落ち洗濯をするとハ北ろと一笑す

一一旦修理した肉でも違ふ薬味ある薬七大
破と及んで出陣を大略拍の肉小鳥の薬と切
れちいのまを閉ハ出ハ薬の修理を家人の勧
めるけれど肉を先人よりくるへと云ふ、
薬の修理七方ことのと、破れ出ハ修すべて
おく、薬の力の要らぬものと云ハ酒以上の

ものを云へ、酒云ふ勢ハ

一寸珍本を集める習ふすぐつき繰つてみて先
ちまんがの、ふるぬ散賊をして毎年の稼を
ふるを嫌ふことをうあるも、流れと氣ハ谷あるを
走寸事を買ふことをうるへ、そんと思へハ
金を惜むべきものと、勝手な理窟
をつけるを馬鹿の骨頂ハ、

一ある書物の終りに「寝ぬ間に陽拍を
どんな英雄豪傑も寝ぬ間に陽拍を
忘れるるものを」とある深宮の産
人ひも結婚の行ふ宴まるを、そと陰戸の拍
を入れて見るものを」とあつた、よく本能を

寄つてみる

一 自分は二十餘年前大患に罹つて両眼数年間衛生をつとめたれ、その為に切て生き延びたと雖ども近年翳面の神経ゞ追々興奮して左眼を開らき難くなることあるも、えんるゝで外を出て女を見ふ程なることゞの無くなりたれ、此の翳面の災も或は衛生の一因となるべきかと、列侯唐の病患を切て人を救ひて長寿命を長うらしむるものなれば、自分の如き無恢者のものゝ如き病患を切て救ひあるは或る程度の必要である程度迄思ふ

一 国交が破れて世界の露西亞とロシヤ工がやつて来て居る、政府は拘束後の国家の交渉をやつて居るとの説、或る方面からは北お客を歓迎ちんとするものがあるやうに思へば、尼港の件の後始末を為さんとせるふこともあるも、これも亦たのである

一 偶〻頼春水の春光集を読む、山陽酒家を訪るの詩あり、山陽酒中からめべし即ち和す

子成姪作賜酒家 又寄二新歌城北

和答

嘗先考本三仙、一仙騎鶴已十年、酒今

二霸婆二仙、更婆二霸已無人、二霸盛酒二仙
碎、一仙石臼俱流涙、勉飲殘酒聊自慰、
酒盡霸傾人忘睡、酒道南見北宣霸、
去裏十經跡顯、吾郷文塩樹金標、大似
豊公拉羣豪
山陽の徒と云へく已有古律之跡然共不
如北溟之真情実該謡之感注貼壁
自爲
詩中一仙を欠くと云ふは真秋の折柳なるを
云ふ自著山陽と霸こと一項中北溟欠
くべからず、山陽の二霸歌も併せ録すべし
一　又一詩叔姪の至情を詠するものあり

有馬茶舎別子成嬰
昔携河貫溝山川裏嚢勿忘三十年
翠松憑此叔持力跋渉王嶽別馬鳥
三十年前山陽の者侍なれと旅行の時と
山陽十六七才のちなり、年ちうし、人うと此ちう
年叔父を扶持とし各不東西をちう者
爲の感服無量し、此詩も山陽良子に入るへき
歟
又一詩ちう
吉子成侄来自京有行次韻
山河護舊府、奪木武固陰、痴叔無人問、河内歳
思我深、春寒千里路、夜話半宵心、常破吉

同睡、星怨、雪後、林

一春草堂集一長篇酒器詩を録す、其引に云

く

余求酒新不得其在者、己卯秋啓呈成獲

二古瓶一野春風之一野余、愛玩之餘

就作長律以謝

此詩を弱る多くの典故を撮り雖字を排列す者

為得意の為りて知る所也山陽内実之れを嘉

ハず、三仙の話(前録)を傳ると為す所以也、小林

北長篇の評語と同く

、先生迫屬子成買酒器数函子成実謂余曰

家叔而加以数函非可畏守子成蓋不好

哥(おしさ)

哥(おしさ)休如此耳、

北海点山易を一点するもの、哥(おしさ)の面

倒な字を好むの困り拙ぶ北上数函を買

えてくアルこのとハ山陽の影口也

一山陽の点するを『ポツク』録して見ること新古の

学社用の原稿為て千三百枚程出来北一

夕坂の校正本を印刷すること最早や

四百頁ばかりとなる、之を校正印刷に附す

べきやと商ずるに、何ともに内容の貧なるを

覚へる、北海会二三のよい材料を得ないと思ふ、

捨て去て漏れに貴てるを捨つて一冊のものを

出いて見ようと云ふのであるから、実を一味の

仕事もなく、法師に成し（成）しに扶料と云ふことの多くは枝葉にすぎることなれば、弱きもの俗衆の受け損なふ思ひなれば、勿論自分の故味ゝ出れば、其の学問が鉛槧に托することなれば、其れ迄なりとまるのみなる

一書籍を何を命ずべきや「拙者に渡んなる頼山陽の逸事」とあるが内容をあらはす名なれば、頼山陽の著書の中に頼山陽「瑣々録」なる書あり、漢文式の名きものの世に多し、三十六歳の作なり、「拙者」もおうい、逸事も知るべき名の工夫もつらしであろう

一巻中の挿入の書籍　日ハ何を採るべきのこの文章決めず、文章はの書中に成れるものを採りたい、例へば大隈家に於する俗名の古今集序や、就成丹羽に於する理学叢書や、錦袋春夜三画を嗜さん等を辞したる時の二冊（梁星巌と共に出版したこと）臨終迫るまでいた史論の稿（精飼新不の説を駁したること）自叙の印弟に無設（雪の巣に無くなること）を取り入るべきもの、邪馬台の図や樂翁に日本外史を著した時の世や山陽外史の著の図をも珍らしく思ひ入るべきもの、又出問を露を言ふ

その中の出版の調べてあるこんなものを山陽と称し
と題する記事もあるから之入るべきも、倘後
の西野梅庵の四の出の在に山陽の探し出した
うの今も保存せられてのるとそこから梅庵の方
きいとせこの文出七宮をつこと取て入るべき數
梅庵の図と三原城志あんも北行を宮
きいこ取るを聊の面倒ひなるも、初時の書も
一ツ位を取るべきものなる、藩図書も拾とる
後の方板を五名抜帖の内に山陽自筆のあ
が入つてあるの比較の思ふ自筆なるべ取り
入れてすし、当座て考案せばいろ〳〵ある
べし（時間の為不持）の図も入れて一の也、

一、支那の土匪が鐵道を破壊し外国人を掠奪し
山寨に連れ行て、捕書の命人質の助命を求め
しくハ金を出せと云ふ出遣り口も日本の昔の彰
義の如き大江山式なれども大規模で国際問
題とそうして、治外国をヤッキリ云ふ氣を様
人でのるが、攻めれハ人質を殺さるを老嶮の
あり、支那政府も治外国のよう豊富に過つて一
旦ハ彼等の云ふ通り金で釣らんとしたが彼
等ハ金ハ欲しいのでなく、支那政府も度
重、愈々軍隊を流出せんとするも治外国も
又も危険な土匪を敢つの人質を救す
所以なと云て異論を持出す、此今の支那ハ

比問題で苦慮してゐる、土飛してそうゝ海の難い
兵力を持つておるとそれからワワワリ攻撃の七出
来ぬ形勢である、すると新侍を今現に実
演してゐる、活動写真もあるそうな高観
北京に特電中に日本人のかハつて居らるいのを
幸に米国ひとを之れの為めに日本を屈押を
やつてゐるとも云ふて調ハんちゃん言ごりをつけ
てゐるとハなるまに

二月廿四日記

○山陽が或る傳の写に詩を出いたものがあるもとこ
うる有りてゐるを少えなかつたその委しいことの
記憶ないこうゝ此の図ゝ出在に此の詩宣
を貴殿のあらつし、三樹文峯 松蔭の詩

を模刻して一巻を此のうゝ見つけ取り
あくず資料ゝと手まん、好時つて時を
を後もも見ると、嘉永七年の三樹の詩を今
るも二十年前山陽うゝ人をはめて河内に
潜んに時、詩う出来ぬ紙う無つたのを
こゝの写いてあつた、ある傳の写を出きつけて
るの傳を基く北とある、等傳を写数と京
てあ時を作宝め出雲の日枝ひ北の写を人
しくどこうの拓有る新井に使るみて、死を
北傳を一個者の主ゝゝ入つて来堂に
てハあ東京傘ゝ自分ゝ、維的を
憶ひ起しも、北宝を塵煙推辛ひゝも拙の

41し、賴家の子孫に頼を求めたとある、是も仲
のあしき者と世を室に報じてある事は
こゝに

雲林紅黄葉未脱、出城意折紀木
未、尋到曾城喜酒樽、藥僧応恐
熟面笑、手有花枝鎖雲、呼楊
鋪席依林樹、一條藥沽夕陽照、通
梁愈笑親漁刺

松葉の頃、まつこんを好して文政辛巳小春の
作とみてある、松葉を北條修理殿とみる
とふも、嘉永壬子春或る人の撰くまま
も鑒定を求めた事は即ち改化ひあるを

とゝ世ゝ話をも佛也和してみる云く
出城夕陽紅已消尋到野花殘紀道
應恐花時曾醉中、手有烏巾腰有
雲、呼楊燈酒依林樹、雲裏林空行
覓鶴、一條藥沽雲裏影、時通筍要
我親漁刺

整もまゝ改化のあう沽もよくうつてみる
北條山房の集中にあるやあれや未比指
するの皇の道のまへ、先この角
と世こ存してみるのうち孫
未比詳うひまへ、北卷何
北條星分何人の手のあるこの世こ石碑ひある

何んぞ云ふ山場色々の物と思ふ可き好資料
である。　　五月廿六日記

○大隈今朝、井上庭園の案内記が要ることいあり
ら高須藩邸をいろ〳〵見物せり。自身もうる
せたことの出来上つた云関する一問答ども
昨巻の巨大の拘子がブラ下つてゐる、こんな記
に後的をもいれた時なる、一寸困つたがヤット
記臨うる侯の流儀を情知した、侯も夢の
て拘子を解しても云へんを飲をスクフの器に
スクフを拘をこやクルことの用みてゐるスク
リフを乃ち救ふもある、飯を人の餓鬼を救ふ
ことのあるスクフとこふことの飯七を附け

十二

て云ふ〳〵自己の如く、北英を単る個人の餓
鬼を救ふのみならず、国民を救ひ天下国家
を救ふのも亦此器なりと云ひ、こんなことを少き資
格の校友を言ふ、此巨大の拘子を特別に侯に献し
人の大拘子が是りとのみならず、平素
此の拘子の資淵面なる喜悦の国家
ある拘子屋の番頭を救ふ美の玄関先きの番頭として
ある様にも風せられて居る味が
○松浦武四郎が史的の古物を知友に贈つて一器
の記念を作つたことも隠れもないが　こゝに又

山陰道の宍道湖辺に史跡古社び家を建てし人うある、そもそもその地の富豪なる木幡黄雨と云ふ人にあるべし、獨乗山荘くに獨乗宮と云ふのうえにあるべし、此の古社の建築もあとび建増しとなりあるべしとの、その古社の図を記したるを見るに、松浦らしも造うれ珍奇なものを多く集め、遠築の祝模も大にあるべし、今左の其目を抄す

一浪華四天王寺鎧　金具のアトつり　推古天二年　床地袋前尾に用

一洛東清水寺舞台柱　貞観二天維持に寄き元年　貞永十年　床隅柱に用

一東都墨堤言問古社　烙印あり　床脇壁上に用

一出雲大社鎧　表面龍中裏面サリホウノ彫刻あり　寛文年代　棚間に用

一出雲神魂神社本殿八風板　空社指特ノ彫刻あり　貞永年間　同上

一大和高麻寺塔樓　天平時代　麻茂し塩に用

一武蔵多摩川舟梓　像壇前柱に用

一出雲鵜淵寺障子水板　三百五十年前のもの　像壇二枚戸に用

一同清水寺古材　大同元年　茶家内脚絆に用

一洛東東福寺古瓦　貞永年号　敷き土地内瓦に用

一同方廣寺古瓦　慶長年号　同上

一出雲神魂神社中殿八風板　貞永年間　麻六寸に

一豊公乗用船鳳凰丸持ち　表面菊裏　慶長の彫刻あり　三百年前のもの

床脇特ニ)リテ用

一東都墨田川竹屋渡舟棹　弔仕切柱ニ用

一日日本橋ヲ時ニ建テレ奉行所制札　西徳年間

額トセシノ用

一伊勢宇治橋町蓑表根元　縄模ニ貫キ

燈籠ニ用

一日神路山大杉切株口　燈籠の笠ニ用

一浪華玉造稲荷社殿瑞板　三百年前

地蔵前ニ用

以上

山陰ニ出ル人比杉此花を詠ハるうるハ此の貴族とする北

地形北の屋、ある文人ハ光社の凱平寺の句、江山有

巴蜀様宇自齋梁」の二十字を移して評しハの

と鎖のけ　　五月廿六日録

木幡黄雨とゝ木幡久左ヱ門のゝ北

人文庫とも有し曾て国も彼場合の今

昔ゝ　ことあり社年　房総、一二度面し

ハことも有るが、ハツきりとしゝの

○故濱村義ハの詩書十二枚を寸珠帳ゝ

とゝ書屋ハ拾ち来る、ゝ友の業する所、弟ニ架

中此人の詩書を欠くことを

裝潢飾りまて寧ろ優ゝ高く、為ゝ

躊躇す、義ハ詩書ゝ秘宮在中ニ殺す、此ニ

巧ゝ　ゝ此情力心のことを欠くゝ、豪ゝ

文をお手のものの、皆伊藤と神田の西京に王翰の書の詩帖を得す、人我小説屋の宝庫なり、王翰往年日本に来り滞の時の詩を録し東海詩録と号す、栗本鋤雲、伝田白芝、中村正直、川田剛、秋月種樹、岸直輔の諸家、之を芳

十月朱吉記

○西洋の男根を異名してパトリツリ、ヘルーとなす、日本の拉致の男根の異名いまゝ其の故を知らず、日本の拉致の男根を呼ふあり、其撰を一つなり、云ふる多少時に八花を以て呼ふ

○紙巻こ　ニコチンの毒なるもう実也唯と之のう紙を喫して毒あるやなやおのつからこの別問題なり尾に紙巻の価を家閑庭

指して化学上の試験をなすとき果を必ずくるの文書ニコチンを得ることを明瞭なるを得ると、火薬ニコテンを破壊するのあることを明らかし、近ごろ紙巻の毒を衛生家の説ることなるべし

○獨逸という戦勝するの共ひとる土地を二十九の三哩、之の日と同時なる地域内なる職を失ひとるハ三万五千哩、列国の戦費の巨大なる獨逸の金財産の二倍をとるとなる、ロイドハンコー！これも獨逸の国情あり、英国の政策上獨逸の復讐を可とせり、紀元なる英国の政策内容を長く及人で獨逸のマーリに大なる影響を及ぼ

しとう、ロイドジョージの時一万五千マーリが急
ウ三箱マーリら下賜し下賜し、又佛国の戦勝の結
猶ほ多額の還を得たる日アルサス、ロートレヒンを
獲たる者れの所なり、佛国之れを得たるを
獲を喜ぶ餓するの花崗を得す、こんルールを
に領とする不以なり、ルールを獨逸も多数の
花崗を産する所なり、又の地域のエッセンル
ルツの炭坑なるこんの故也　田上汀

○印人服部耕石来訪、雑談中、銚子のこと
を以て、耕石千葉の出身なる故銚子のこと
よく知る、漁夫の言ふこと、銚子の漁夫
の地引網と曳く時なる、漁夫中数の高き者

大勢なるあげると叫ぶ高の数の不思議の数
なる表示なるまぶ少くこえ、田畑を耕すること
も地勢を聴くやなる未報を聞くこと地
せつけ、網を曳くの手傳をなすを例とす、網を
引上げ比魚数を報ぶ得るたけ、報酬
として賜ふるの習慣あり、力一杯を出して曳
きとる結果を力の働ふたけ報酬として受け
えるといふ、おもしろし、又地の習慣として
一網の魚の一割を漁夫の所得とする■ことあり、
之れを方言、、、と言ふ、スズキルの言葉なり言
初を窮元しなるの後すること
りとなるらし

滝を華山と銘を超えたその後を
往々戒石の今も彼地に有まる、自分ア七二
三尺ばかりのある、と耕石の話しを、寄のて
華山を盗賊いたしを思いてやつれことを
倚つてゐる、田舎のひあるふら、盗賊
の絵をもと提燈尾を見つゝ、
輝ふ住ゐるゝ、という、幸と西手うまれ
うとこをみて、華山をもらす、旅宿の
夫が助業を提燈尾の為める頼んで、
酒屋を華山を互を流していろくの
戒書を心つて、やつて、提燈尾きこのを
又て流石に凡業ひてゐるのと感じ、一番合

心の書を自家の提燈尾の妹の後を
を保存ひて、ひとり銘の名物として珍重さ
れてゐるのも地絵ひもる、大きさも西の内大
で国枝を婦人の著や、妹てゐるを
の側を男う身を片寄せて行燈の火
を消えとする国ひ業力生動の絵う
あるとこ、又東伏見宮、銘のより差
を御不形のもうう、銘の基家を作くて
一幅の華山の戒書の御言こを、ひ宮
上まるつたこのを墨世が海と投まる刺
那の国ひ絵ひ岩る、湯巻がまくてゐる
宮うを行まる法動してゐると云

鮮石なるも黒色の印材を示さず、一関防大印、石
質似て石質あらざれども、木質にして重量なく、摩擦
なるも光澤あり、色深黒、何等を問へば撫順
炭なりと語る外に三顆、揃、前者と同
八形小、朽漆に似たるものこれ、重量甚だ軽し、
扶桑木の類なるべし、色深黒、他色
を混ぜず、摩面明るく光澤あり、これを磁石
に混じあるものなれども木の化石なりと云日本
産なりと、北蕃の印材を豪州を流れ瑞
珀に刀を下す時と同様の故あるべし、
石の後なり

○漢合璽なるも雅色を帯びたる細川潤次郎

著の養蘭須知一冊あり、細川隨筆風の著
述にして、大概二行の段あり、
而して如斯ものあること未だ聞かず、
漢文にて著したるものなれども十一枚の小冊なれども
自家の経験を述べ、価値あり、数の形式
すべて他の著書と同一なり、北色点珍本にて数多へ
き歟

○余は格別愛玩なるものにて日誌を
し居る小冊あり、ものことにして
を書きつけることなり、毎日、項目
を記す、小冊を数年
旭莊七余と同じ癖にて廣瀬
七日間項目録 倫志

録」を日々心うつ、積もる有也十卷七千五百頁
日を為すもの比と云、但し写る落文ひ、
加茂経祝の比、口授して門人二書の比
とあるが、記るものの多い日也、絶筆の時なる
歟し、故今のことを云、義業の人の方起
ひ出るる、加茂の一族てるものとして云に物也、加
茂自身の語る所也、右
余所著日間瑣事備忘録始天保癸巳之日
至今日己酉有廿十卷七千五百餘頁矣、余経
視不能親接筆、毎日以印牌口授門人録之
爰書之日輒数千萬言不能全畢至辰
牌人務紛起則息之夜復補之、故不暇校

正其以喜訓相同記者不可勝計且雖以止
備遺忘尚詳察易俗而不尚問勘古奥固不可
古文例視故未敢断人云云
此文中、今日とあるは、文末に年月日を顕く
侍る事、年間うを知る由なし、此備忘録
を日記とあるは、余の此冊の類なるを以
五月朱引記
○五月朱九日下谷の古庭に海東金石苑四卷を
購ふ、此は諸城劉燕庭の著す所、固八本あり
しかも散佚僅に一半を存することを跋中に
云、乃ち此四冊は正に其跋中に言
所謂南紙に属す、余が架中に金石拓多く

妙義の奇勝を國家へ献納

群馬の豪家柴垣翁が錦老山は翁の私有地だつた

群馬縣妙義山は日本三名溪の一として耶馬溪、寒霞溪と共に昨年内務省から天然史跡名勝記念物として保護の指令を受けた奇勝であるが、同山は白雲山、錦老山、錦鶏山の三峰よりなり、中にも錦老山には有名な石門や無數の石柱屏風岩等奇岩怪石の殆ど全部を集め妙義三山中の

隨一の

なかめで年々三千名ぐらゐづゝの登山客を呼んでゐた、然るに同山の中腹から山麓にかけた肝腎の數百町歩は同所の豪家柴垣鐵郎翁(七)の所有地であるのをこれまで誰も知らずにゐたが昨年内務省から實地踏査に出張した國府原東氏が發見し斯かる名勝が一私人の所有地なる事を惜しんだもの丶如何ともし難く内務省でもそのまゝにして今日に至つたが今度鐵郎翁は前記所有地全部を

國家に献納せんと

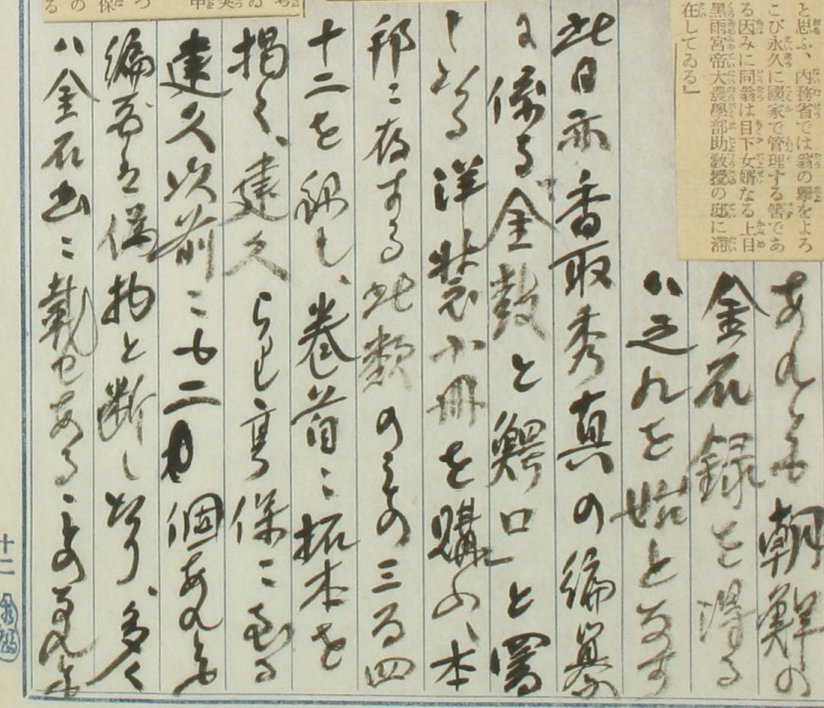
國府氏

を頼んで上京し廿九日内務省に出頭その手つゞきをすることになつた、右につき國府氏は語る『妙義の肝腎な所が民有地だとは大概の人は知らずにゐたが昨年自分が實地踏査の際これを知り柴垣翁に面會してあなたは死んでこの名勝をどこに持つて行く氣ですかと問ふと、地獄へも極楽へも持つては行かぬが少し考ふる所があると何か心に期してゐた樣子であつた、ところが今度突然上京して國家に献納したいと申し出で

其手續

をする事になつたが昨年史蹟名勝天然記念物保存法により昨年指令を受けたものの時價にして少くも十萬圓はある

と思ふ、内務省では翁の擧をよろこび永久に國家で管理する筈である因みに同翁は目下女婿なる上目黒雨宮帝大農學部助教授の邸に滯在してゐる」



文部省國語調査會決定

常用漢字と字略

實業之日本附錄

常用漢字

[一]一丁七[丈]三上下不世丙亜[丁]中、[ノ]丸主[ノ]久乏乗[乙]乙九乞也乳亂[一]了亜[二]二云互五井[亡]亡交京享[人]人仁仇今介仕他付仙代令以仰仲件任企伊伐休伯伺但位低住佐何余佛作使来例侍供依侮侯侵便係促俊俗保倹信修伸依俸倅倉個倍倒倣借倫候偉偏偶偽健側偵偶傑傾僅億僧儀儲償優[儿]元兄充兆兇先光免免兎兒[入]入内全兩[八]八公六共兵具典兼冀[冂]冊再[一]冠[冫]冬冷凍凝凡[凵]凶凸凹出[刀]刀刃分切刈刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛剖割創劇劍劑[力]力功加劣助努効勤勇勉勧務勝劣募勢勤勲勲[勹]勾匁包[匕]化北[匚]匹区[卜]占卯[卩]印危却卵卷即卸[厂]厄厚原[厶]去参[又]及友反収取受叙[口]口古句叫召可吋史右司各合吉同名后吏吐向君呑吟否含呈吸吹呼周味呼命和唱哀品員哲唐唱商問啓善喪喜喪常嗣嘉器噴嘉嘱[囗]因四回困困固図園圓圓圏圧垂型垢埋城域執塔基堀堂堅堤堪報場塔壁塚塗塩塾墓墳墨墨壁壇歴壊[土]土壮壹壽[夂]夏[夕]夕外多夜夢[大]大天太夫央失奇奪奏契奔奮奥奢奨奮[女]女娘好如妃妊妙妨妹妻妾姉姑姫姿姦姪姻委威娘娯婚婦婚婿嫁嫌嫡嫌嫁[子]子字存孝季孤孫學[宀]宅宇守安完宗官定宜客宣室宮宰害宴家容宿寄密富寒察寮寝[寸]寸寺封将專[小]小少尚[尢]就[尸]尺尼尾尿局居屈屋展屏屑[山]山岡岩岬岳崖崎峯島峡崇崩嶺[巛]川州巡巣[工]工左巧巨差[己]己[巾]市布帆希帖帝師席帳帯常帽幅幕幣[干]干平年幸幹[幺]幼幾[广]床序庁底店府度座庫庭庶庶廉廊廣廣廻[廴]弓弔引弘弟弦弾張強[彡]形彩彫影[彳]役彼往征待律後徐徒得従御復循微徴徳徴[心]心必忌忍志忘忙忠快念忽怒思意急性怨怪怯恐恥恒恩恭恵恨悔悟悪悲悩情惑惜悪悲[言]音[想]想[意]意[愛]愛感慰慈慕慶[戈]戦[戸]戸戻房所[手]手才打托扱扶批承技抑投抗折抱抵押抽拡拘拝拒拓拔拘招括拾拷持指振捕挿捨捻授掌排掘掛採探控推接捉掲換握掲揮援撮撤[支]支[攵]敢改攻放政故敏教敬救敗敵散敵敷数斂[文]文[斗]斗料斜[斤]斤斬新断[方]方施旅旋族旗[无]旡[日]日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昨是時晩書晴晶智暇暖暗暑暴暦暫[曰]曲更曹曽書最会[月]月有朋服朕[木]木未未本札朱机杉李材村杖束杭杯東松板枕枝株根格栽桃案桐桑桜柔柳柱柳栗校果枝枯架柄某柴柔笠栃杉柳栗梯械棟棒棚棟森植栢業極楽樽概樹樹樹樣樣横橋橋橋橋橋檜檜檜

常用略字

（小字ハ字典體）

勧(勸)権(權)滝(瀧)歓(歡)観(觀)
沢(澤)択(擇)訳(譯)駅(驛)釈(釋)
変(變)恋(戀)蛮(蠻)湾(灣)茎(莖)
径(徑)経(經)軽(輕)併(併)塀(塀)
瓶(甁)餅(餅)研(研)斉(齊)斎(齋)
済(濟)剤(劑)残(殘)浅(淺)賤(賤)
銭(錢)労(勞)営(營)栄(榮)学(學)
覚(覺)挙(擧)誉(譽)断(斷)継(繼)
歯(齒)齢(齡)湿(濕)顕(顯)窓(窗)
総(總)属(屬)嘱(囑)為(爲)偽(僞)
帯(帶)滞(滯)参(參)惨(慘)両(兩)
満(滿)発(發)廃(廢)鼠(鼠)猟(獵)
乱(亂)辞(辭)潜(潛)賛(贊)走(走)
徒(徒)従(從)縦(縱)悩(惱)脳(腦)
処(處)拠(據)担(擔)胆(膽)来(來)
麦(麥)寿(壽)鋳(鑄)数(數)楼(樓)
楽(樂)薬(藥)読(讀)続(續)竜(龍)
滝(瀧)随(隨)髄(髓)庶(庶)麗(麗)
聴(聽)廳(廳)虚(虛)戯(戲)遅(遲)
解(解)独(獨)触(觸)畳(疊)摂(攝)
虫(蟲)蚕(蠶)仮(假)児(兒)刺(刺)
励(勵)営(營)国(國)囲(圍)円(圓)
図(圖)壱(壹)実(實)写(寫)宝(寶)
扣(控)叙(敍)条(條)様(樣)帰(歸)
気(氣)炉(爐)犠(犧)献(獻)画(畫)
当(當)尽(盡)礼(禮)称(稱)糸(絲)
欠(缺)声(聲)台(臺)旧(舊)万(萬)
号(號)証(證)豊(豐)弁(辨)遥(遙)
辺(邊)医(醫)鉄(鐵)関(關)双(雙)
霊(靈)余(餘)館(館)体(體)闘(鬪)
塩(鹽)点(點)党(黨)亀(龜)

（一）本表にない漢字は假名で書くこと（支那を除く）の人名地名は假名書とすること

（二）固有名詞には本表にない文字を用ゐても差支ない、たゞし外國文部省臨時國語調査會では過般總會において右の如く常用漢字表（千九百六十三字）並びに略字表（百五十四字）を發表したこれが實行については大體左の如き方法をとるさうである。

一、文部當局は本案を尊重し、出來るだけその實行に努力し、國定教科書改訂に際しても、本表に準據すること

二、常用漢字表を、タイプライターや、モノタイプに採用すること

三、常用漢字に對する權威ある字典を編纂し、字音や、字訓も、出來るだけ整理し、地名にして、常用漢字以外の文字を用ゐてゐるものは、漸次これを變更し、また姓名も、ある期限を設けて改めることを許すやうにすること

（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと

（四）外來語は假名で書くこと

四、學術上、及びその他の術語は、なるべく常用漢字であらはし得るやうにすること

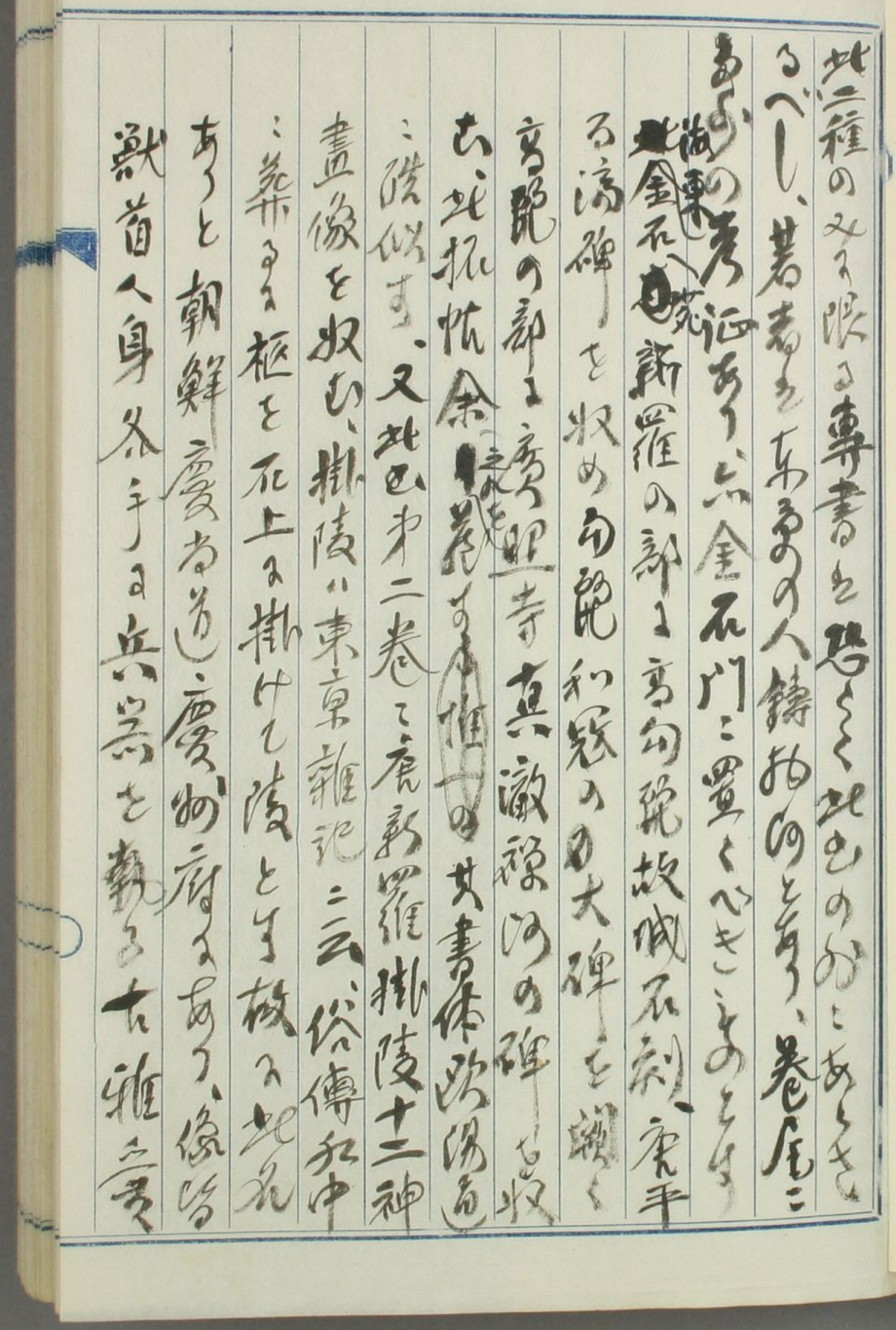
五、今秋行はせられる攝政宮殿下の御慶事を期として、常用漢字の實行を大いに宣傳すること、又各新聞の賀表や賀詞などを常用漢字の範圍内で起草するやうにすること

六、全國新聞社の大會が催された時に、今後常用漢字以外のものは用ゐないといふ決議をして、之が實行に當つて貰ふこと

七、新聞社、雜誌社の聯合團體を別に作つて大いに宣傳して貰ふこと

實業之日本　第二十六卷第十一號附錄大正十二年六月一日發行大正十二年五月二十五日印刷納本　編輯人　增田義一　印刷人　有本歡之助

妙義の奇勝を



すべし、又因幡国府西岳角墓の十二神
畫像を刻す、文字の歟首人身にして各々兵器
を執る、西横前右と因こうず、北角千墓の
廣時造る所と云、角千墓の名也、
又廣時奉德寺鐘の左右画像二枚を
収む、廣時横の文を画しその中の人物あり
人物の頭上文様の如きこのあり、我天平の古畫
を見る故あり古雅掬すべし、

六月三十日の録

○副本全く複物なしとする秘府略第一大巻の前田家
所蔵本秘府略第八巻にして布帛部第三
乃ち錦繡の事に主らに係る、北方の本歴い巻尾の跋
にあるが如し、天地間二巻欠する内、他の一巻を徳

六月三十日記

秘府略一巻前田侯所蔵而自光世松雲侯傳古史
載 淳和天皇天長八年滋野貞主等撰秘府略
一千巻蓋諸種秘府載籍以類纂輯因名曰秘
府略四部類書此為権輿 書籍亡佚僅存二
巻松雲侯所得是其一也侯好学深愛典籍
散佚博搜書素極全璧石室之秘可謂刻鵠之
不則作副本恵為諸侯間及十数万巻皆
造三條西実教卿、示此秘府略二巻侯嘆歎
不措乃使侍臣就而謄 仰慮其寫必刻意
殆其一巻則為此書而一巻則帰成簽
也文庫文庫主簿岩崎徳之丞知流卿行就

北二卷（滄海遺珠崑山片玉山堂肆考）

乎

大三十二年一月

刷本版を顧問
子詩清書叢刻

○江戸の貸本屋もいつ頃初まりしかの考ひるべし
其前の白文

貸本の史記もの走の貸てうか
とある、北の貸本の二字が貸てうかの意味
なるべし、元禄の時既にありしと云へども、尚し
若迚家が参考書を得るも能はざるの不便も
感じしなるべし）さい、村四方阿弥陀如来

十二

で家に帝鑑にあり比所うあり比
とあるを、ろ阿の人こ貸し比拉本を林羅山を
一冊本移しとみる、ろんろ京伝が集を何
日移ろ阿の五）海程参考第七冊同しく本
を貸し比ことう載つてある、紹巴の関係ろ
本を貸り南戸の用を弟しいことろ比ろ

○書籍（今ろも）配本を三冊ろ七十五日
と書しなる書を、天明七年の刊行と侍ろ、高橋江
戸に流布の高為、就中一問屋用の菓子や美
えんどんの数を其の響常く家の看板や高標
を以てあるいしなるこのろ美濃紙半載横

本五十枚、天保頃の市中の生活状態を知るに信ずべきもの、菓子屋の店二百十九軒を数へたるに、蒸羊羹銚子焼十八軒、煙草屋の店を二十九軒、煙草屋の店を附記せるも、武士の内職なるべし、巻首に三省舎の名を冠せるものあり、ひとつゝの義の春、名象を記したるものの他も豊富なれども、原本を稿したるものなるべし

二月三十日記

○最近四五年来書商の状況なる形容なる種々の絵を印刷したるものメウキリ多くなりたり、廣重

北斎などの絵を刷りたるもあれど、最近の洋画なども脱化したる形容のもの、最も多く、寸尺を逐うて、著色の半切を必ずとし、大きさのあらましを西洋紙の三角義を入るゝ程の尺寸にするもの、多きを見んば、婦人の女子学生などの風俗を見るべき数、三年前に比べ倍加せり、蓋この家の子女の英しとする各種のこの脱ニ百種ならざるも、少くとも百種の数に達せり、絵もしきの轉化せんの数に達せり、絵もしきの新版画を漸次捨てゝ、方間目新しきこの興に、これなる文化文政頃の絵物の一種なる方間の廣頃刷りの事なり、恐らく文化文政頃絵物

倭の行なる時ゝ償すべし　十月廿一日記

○戦勝ゝ戦ふこと能はず、ロシヤ償金の取れぬ如く、こゝ度の戦争は獨り一国のみ戦ふこと失敗なる、戦争くらい償金を失敗なる、ハメロの如き無い神を解き振り出す、光竟金を掠くとこゝ行はれないのである、北戰に就ても獨乙の志ち一の能性を帯び実行的のものである、獨乙も露西亞戦争を訪し、孤国戦争なら戦敗ゝこゝ必ずして賠償を取るべきこゝを早く楽しいとうも巨額の現金を取ることを駄目と見切りをつけて、妙意を元へ方針を取ること乃ち第一日露しい工業地を保全すること、第二鐵山石油のを取得すること第三鉄土を取得すること

と北三法に據り賠償もし出る外に無き故、乃ち露西亞と異なして第三の法に據らんとす、又敗北国の政府を第四の個人と獨しきの代償を拂ふべき事とし、又獨乙政府を潜に土地や鑛山など自分の個人と変更金を得んとしたのを、思ふに北方法なるべし　前掲ゝ現金を得ることひあるこゝ獨逸国民に兼ねて戦敗ゝとなるべき所を防ることを研究しぬいてゐるから、全聯合国の為すを不て窮こゝ笑つてゐる、こゝんを果て米和維持」能法の主義ロロチン、エスこゝ、ウエスタルの機論説中にこゝ拘線す

○今日出版部と高田程村と久江とへ行て極め

同上記

軍費の内議を凝らし決定するに至る、

一 新株に就き十二円五拾銭拂込ことの新株を既に十二円五拾銭拂込あるも更らに同額を拂込むに付ても前例に據り賞與金を以て拂込を為こと元つるも但し早稲田大学の法人として賞與金を受くべき人格なきこと故に之れを学附の名義を以て義平の金を交付し之れを以て拂込まるる出版部も亦利益を多く生ずるの必要大の教職員等に嫉まれ平生

困ることあるも、三割の配当をなしおることに既に注目を惹くが、実は利益ならざるに人なきにあらず、六割七割の配当も出来る位利益あるが、之れを社員に配つ機会なきは何十年紀念なる時を待つに一二年一寸手間取れる、追て利益の多きにあらば命に応じ配当もつかうとする、新株を第二回の拂込を今の場合に於ても必要ひまつの前例に基づき利益金を賞與金として頒ち、それを以て拂込まるるに至らば、之を待ちいくらか配当辛も下かる、代理部の拡張を図

ようと資本も要る、唯だ何人か多くの資
與を頼つことの目こをつけんとも、也うく
八九の新株主を此る老婆も別段のれ
くあるつて、新株主が対して来ると賛
與金を拂込を与へらるるが不一の結
とする譯を今を株主が皆何等の
疑を抱てみることを賛與を受ける資
格のあるけんなる、新株主がかハること
此の便宜の無くする者新株主を此る
前に此るを決行を要する、又新株主を
此ると云ふことも出版部の門を開放を
る実のあるふすまむこんを慰りし事

が為うあるを決行をすることゝなる
一 新株主各五十の株九万を入るこ
出版部の十万数名を有び利益を
設新すること、ことく見へ此のを先前
新後の経ひあつた、又高田が就常
の多数の株を取ること、高田の
猛勢う多く株主になることも期待
を惹いに門戸開放を久しく余の資
況ひあつたるまむ行はんそのつ先資
を門戸を開放しくも復り後す
株の無けんべる実行はんめ前年

新株を以つて時価二百株、大部内の
切者に無償にて為替保管されてゐる
から、なんのすることもなく、
全く偶然の事、不都合の新株
買収を受ける為、うせしたのと
如き株主を搾取する搾取者の出し
た同盟と言ふの株の減ることも其
為替の名義の株を貸却して其名義
を没収する新清算の都合のよい、切者ある部
員二人者許の株を渡すことも
が漸やく決して、これを解る意義に

て決定とよい門戸開放とは
あるも遂に他人を引き入れる事
なるべし、現に株式会社の切者
者や二三校友先輩を入れるべきの
併しこれも主義を門戸開放ひ
の事を廿世紀の株を譲り受け
このひあるも、現金作為の境遇
の人を追この配当計算する線
搾取金を貸すの便法を云ひ
ある

此の役員の補充等の事を決す、為早稲田大学の
配当以外の金を第四計の金を寄附するも決

し等、

○大隈侯の邸内紀を心ざす往年小野圭次郎が園芸雑誌に大隈伯爵家を尋ねての記を得て誤もなく一二発見するべきもの実あり左の如く録す

抑も此邸宅は嘗て松藩主松平淡路守侯の別業にして天保年間江戸の名園を摸倣したるが、維新後八大の荒廃に帰し、名園甚だ園中の花木を伐採し、炭を焼き多く樹木を斬伐し、遂に他に移り、明治七年頃に至り始めて伯の所有となり、漸次改修を加へ、遂に西洋式の華麗を極めるに至れり、樹木を植

十二

植え、池を埋め、流を引き、長江延綿の築堤を造り、松平家が江戸八景を模し、ひろく知られし安藤和泉守公おもうけありしも、尺くす能はず、大隈伯爵家改修されたるもの、小華岡業を起こすこと、華石の誤とあるべき歟

庭内二尾の銅製鯱、唯だ十七尺なるのみの如くの貴物とのみ考へられしが、実の記を見るに

銅鯱共丈四尺五寸、重量未詳、一尾は萬治元年初冬吉日の御鋳物師源吉銅壱作と銘り、又一尾も萬治二巳亥年十月吉

日銅喜洋橋作同子湯を近江大掾源正次の二十五号を三行に鍛りかうと北銅鏡を元来日比谷見附の屋背の粧置せしものなれども元治元年銅鏡二号を獲られけるその内一号をも岩崎氏所蔵し一号の所々存する者なりと

右去年ありしと伝ふ此一基に就て思ふに銅鑄の技一基高六尺の春。形すると金色の昇龍蛇蛇として燈字を攫絡し火焔の一方に秋葉社の文字有り少く北陸に芳名の新吉原仲ノ町の五道庵に防火神の秋葉初めありし時に集

橋名蛟らこれを神前に奉獻せしものなるの維新争擾の際に方て神祠廢毀して北陸に骨董商の手に渡りしを後年に至て元伯爵梅渓通虎氏の所得となりしこと

○六月一日閑に乗じて児童を伴ひて神田の東洋キネマ映画を見る。前の来観客の喝采を博して若干の日迄をしたりとなり。ロビンフッドの映画なり。北劇を英国中世紀リチャードライオン、ハートテット帝がクルセード軍と起して遠征中ジョンが暴政を奪を図り国民塗炭に苦しむ折柄、ハテンジャトン従軍中にて馳せ帰りて、身を義賊なりして国民を救ひつ、

ケエスヌーシールドの森を采源地とし義賊を
図ると云ふ所まで行ロビンフッドと即ちハテングット
ンの假りの名とて、北映書中の豪奪の場と
也所あるも其所と多くの場面を差止められ
と云ひけど、そこ〳〵の長篇ロビンフ
ッドを演ずる名優フエヤーバンクスの軽快の動
心と愛嬌ある容貌いと〳〵観客の鑑賞の値
するものあり、ナイトの使人ハテングトンの敵を
作す場面、王の出征の場面、ロビンフッドが軍身
城塁に多勢の敵と闘ふ所、流れに大敵模
の仕掛すと驚目を覚るあり、もの凄く、余も思
ぬこ時代に数年来毎月三回位映書をとゝのへ

をつゝくとて、北のアアラオを崇及の史劇を
獨乙人に伝て演ちらる、獨逸的到底の味を
あり、着想を王冠貨然七絃と意こ云このの
とゝの帰す陳奏の義味を脱せるの似なり

"DOUGLAS FAIRBANKS IN ROBIN HOOD"

□ユナイテッドアーチスト會社提供

一千萬弗大映畫 ロビンフッド 全十一卷

□ダグラス・フェヤバンクス氏主演

今週のプログラム

は (1) マーチ（ハタノオーケストラ演奏）
(2) 喜劇「結ぶの神」二卷
(3) 喜劇「受付成金」二卷
この間休憩 約十分
(4) 奏樂「我れ若し王者なりせば」
(5) ロビンフッド 全十一卷
説明 泉虎夫 德川夢聲

これはまた英國に有名な口碑であり、傳説であつて、三才の童兒すら知らぬものなき武勇譚である。

□

詩と美の交響樂のやうなこの物語りは、勇ましい騎士、美しい姫君、豪勇な帝王、佞奸な高官、それ等を中心として或は勇ましく、或は悲しく、或は胸を躍らして、我々の眼前に展開されて來るであらう。

□

英國中世史の末葉、その名字内に轟く、獅子王リチャードが股肱の臣快傑ハンチンドンを初め部下數萬の精兵を率ひて彼の聖地パレスチナ奪還のため十字軍の征路に上る當

□

こういからぬ弟君のジョン大公は、大王の不守中、己れの野心のためぬに惡政を行ひ、人民を塗炭の苦しみに陥れんと計つたが悪く失敗してしまつた。

國政乱れて麻の如し……と美しきマリアン姫よりの注進を聞いたるハンチンドンは單身秘かに逃れて故國に歸る。

□

かへりみれば、こはそも如何に、姫マリアンもジョン公のために殺されたりといふ。加ふるに虐政益々甚しきを見て、忽ち起ち義勇の兵、名も『ロビンフッド』と改めてシヤーウッドの森に立て籠る。

□

奇策縱横、壯絶快絶、冒險亦冒險、急を聞いてとつて返した獅子王も力を併せてジョン公膺懲の義戰を開けば、名を慕ひて集ひ來る名弓一粒攫りの豪勇揃ひ。やがて惡人輩を打平げ死せしと思ひしマリアン姫ともめぐり會ひ、王の祝福を受けつゝ、開く盛んな婚姻の宴、宮殿を搖ぐ歡聲、柔き月光の夢に王城の夜は更いて行つた……。

リチャード獅子王……ウォーレス・ビアリー
ジョン公（リチャード王の弟君）……サム・デ・グラース
マリアン・フイツウオルター姫……エニッド・ベネット
ガイ・オブ・ギスボーン……ポール・コールソン
ノッテイン公首都の奉行……ウキリアム・ローロリ
宮庭附の道化男……ローイ・コールソン
マリアン姫の侍女……ピリイ・ベネット
ジョン公小姓……メリレ・マコーミック

役——

同……ウ井ルソン・ベンザ
ジョン小僧……アラン・ヘール
赤のウキル……メーイン・ギーソイ
アラン・ア・テール……ロイド・トールマン
ハンチンドン子爵後に『ロビンフッド』……ダグラス・フェヤバンクス

制——

□エルトン・トマス原作
□ロッタ・ウッヅ脚色
□アーサー・ウッヅ歴史考證
□ウ井ルフレッド・パックランド美術指導
□アーサー・エヂスン撮影
□アラン・ドワン監督

英雄美人俠人渦を卷いて奏でる世界の大ロマンス……詩と美の最大交響樂

今週の奏樂

序樂
我れ若し王者なりせば
△作曲 エー・アダム
△演奏 ハタノ・オーケストラ
△指揮 波多野鎌次郎

UNITED ARTISTS CORPORATION PRESENTS

東洋キネマに上映

さるべきユナイテッド・アーチスト映畫一覽（順不同）

△D・W・グリフィス作品
□嵐の孤兒（萬人期待の大映畫ギッシュ姉妹主演　佛蘭西革命秘史）
□國民の一生（ヴリアン・ギッシュ嬢ヘンリー・ビー・オルソール氏共演）
□恐怖の一夜（カロル・デムプスター主演　ミステリー・ドラマ）

△アラ・ナヂモヴ夫人作品
□人形の家（イブセンの名劇とナヂモヴ夫人の妙技）
□サロメ（全米を驚嘆せしめたる世界の名作品）

△メリー・ピックフォード作品
□嵐の國のテス（血と涙と愛の湖畔ロマンス）

△マック・セネット作品
□紐育の十字街（セネット一流の痛快皮肉のコメディ）
□英王ハンターピン（ペン・タービンの「シーク」を見よ！）
□スザンナ（メーベル・ノーマンド一代の傑作）

△チャールス・レイ作品
□裸一貫（諷刺と諧謔に滿てる全九卷の特作品）

△ゼットツク・ピックフォード作品
□雪辱のケンダツキー（原名ガリソンス・フヰニッシュ）

△マック・リッヂャー作品
□三笑士（佛國名優のユーモラスなアートを見よ）

△ユナイテッド・アーチスト映畫
△マック・セネット特作品
△メーベル・ノーマンド主演

來週は『モオリー・オー』

續いて近日

編輯後記

「五月十四日夜の醜體を衷心より恥入ります何卒皆様の御寛容を」　德川夢聲

前週の「タイパン錄」が大分皆さまの御氣に障つたやうですけれ中々手ヒドイ御攻撃も頂戴しました。今週は別に投書も虐待したいふ譯ではありませんが、皆さまの玉稿は紙面の都合で、次週のブロで御為おせて頂きます。こゝに御為おせて頂きます。

今週上映の『ロビン・フッド』の優秀場面其他のプロマイドエハガキは當館三階の寶店一葉屋と小川町通り良古堂に御座います。

今日は『東キネ』で西洋映畫を、明日は別館の表神保町『新聲館』で日本映畫を御覽下さい。今週は見、五月共演「大愚人」七卷さい、栗島、岩田、久保田共演の「德村」です。

日本一に美しい、そして家庭的な
活動寫眞畫報　創刊號
（定價五十錢）當館賣店にあります。

お歸りには是非
御近所の
カフェー、スズキ
にお立寄りを！
そして冷たい**コーヒー**を
召し上り下さい！

PROGRAMME

(From 25th of May 1923)

(1) March " HAIL TO THE SPIRIT OF LIBERTY " by J. P. Sousa
(2) Comedy " TORCHY COMES THROUGH "
(3) Comeay " TORCHY'S MILLIONS "

INTERVAL

(4) —MUSIC—
" IF I WERE KING " A, ADAM
HATANO ORCHESTRA
(5) United Artists Corporation Presents

大阪毎日のグラビヤ中、北の映畫の記事

六月二日の記

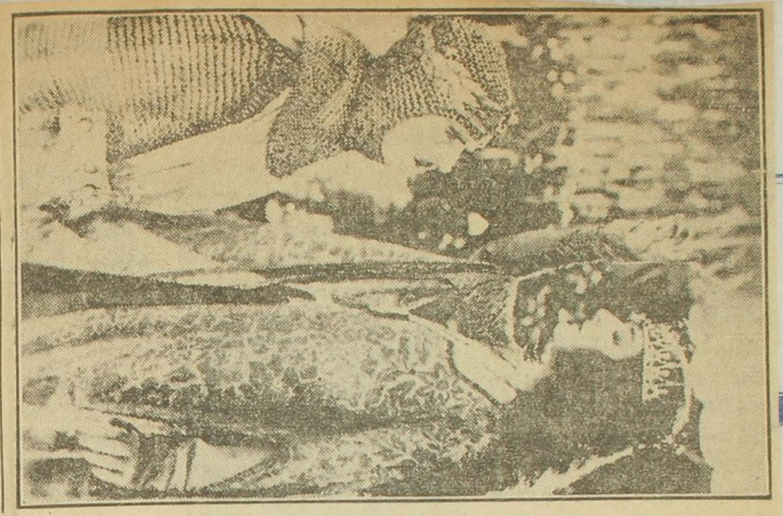
と北の畫のごく親摸の大きなおもちゃ

えるるもの

大阪毎日のグラビヤ中、北の映畫の記事

六月二日の記

あゝ人志きりの「ファラオの恋」と題する映畫を観る、昨日とぎとの仕事の金春館を行き親摸実、味るまでも大親摸のものゝ方面隙お戦のるもロビンフッドのそんと似ものあるも、親摸もロビンフッドに及べざるをうべくして、北のファラオも実及の史劇を獨乙人、伝て演ちゝ、獨逸的到底の味を有す、着想と主題貧妙も終こ恵こ云このものゝ帰す陳腐の義味を脱せ



「ちかどクワンピロ」な模様大
姫ジアンジュ王の女ヤクネ　ドクニモ

規模の大「こ」
母性の愛「こ」

おの〳〵異つた傾向を持つた
近来に注目に値する二大映畫

ロビン・フッド

奈國の獅子王リチャード王が、その名を宣伝として、十字軍の遠征を企てレ、聖地パレスチナに向つて出發した。王はパンクラス伯爵の娘ベレンガリアと、ノルマンディーの領地を、母ジョンに委ねて、出發した。ジョンは、ノルマンディーの領地を、ノルマンディーの貴族ロビン・フッドに、奪はれたことを、怒り、ロビンを、捕へて、ノルマンディーの、獄に、投じた。ロビンは、獄を、破つて、逃げ、ノルマンディーの、森に、隠れ、ロビンの、部下、リトル・ジョン、ウィル・スカーレット、ジョン・ミッチェル、ウォット・ティック、ロビンの、妹、ジョアンナ、ロビンの、恋人、マリアン、等、多くの、部下と、共に、ノルマンディーの、森に、住む。ロビンは、ノルマンディーの、森に、住む、ロビンの、部下、ウォット・ティックが、ノルマンディーの、森に、住む

○帝国第一巻にしるしたアダム、スミスの二百年祭とは
が北海道大学に催されてある。北人のウエルス、オブ、
ネーションスを知らんとせども不行の名著なる
住宅問題の学者の北海道に学ぶを決して解するべし
北海の者を紀念するこの学者述べ学の義
あるを嘆別度度に借しいまも北海道を各地に
つと、貴方を偽に商科大学の用を彼に使用する
ゆえ偽氏列国を一変しいまに帝国第の程々の
敗を二百五十年陸列されてみるに勿論一千もの
年代のうち九百九十九のうち大敗とも云へ(略)
他合別敗を多いとあるも、獨逸(略)雄も敗れ
あつと、偽に帝大国を彼に敗れ新国に合すり帝

大にあるアダム、スミスの手沢本のみを聴くこと
う出来ず、これを西ヶ海のある新聞を偽
士が見出した特殊しかと云へが学教万部
しあり、中にはスミスの手書もあり書入もあり
うしかも、元年スミスの弱後其の義を親族の
二年は今日とものに於て、義後の度葬うる紀珠
出版書印とすることなるべしとの元のスミス
の花もて居ることとうの偽
とうは、スミスの花も日本といふものの幸に残
つてある、現に其エピイ日も高大の列品中する
出てみると、さんと脱今えして其所るを判断しと
云へてある、偽に格別高偽ひもろく手入

つとに名のくこの会の紀念陳列する恐らくこれ朝
楚にあるべし其間一覧の上更にこれを記す所あら
ん
○目下上野の精養軒に開かれて日露の間
交渉の露国のヨツフエを主
賓とせるの観あり
数多新作の精美なる中に於て俗にいふヨツフエを
為駆使して能くすれば毒あり代人として出席せしめ
我が三宅雪嶺氏一回を代表する模様演説
為しヨツフエを差配
誤せしめた南洋を三百数十名の出席ひ数
なるを五百名出張したといふ仰々しいことなり

つとにいふ、今度入らんとするものとなるべく元勲
七十数人をその接来したる為めの別と称する
ヨツフエを高味に模倣をいとくれ
人とと傍らんとみる。
きうく興味の深いものである。ある人曰ツフエ
の日本に渡来をコムモードルベルリーの時の
比すべしとなるかの如くめるるえんなものでヨツフエ
の本元の所謂文的といふまで各列国の文
的とも今く根本を異にしてゐる。故に徳川
幕の末期の日本流の文的とも全然異つた外
国文的の影響人と一時は或るまで驚駭
或るまで畏怖したと同

じ秘れ、霊妙玄の所謂る新文的の義し、之れ是れ
嶮きうとするものが朝野と満ちるが、殊に尼港
の虐殺と称する記臆の今日新たなる、敵愾
心を包蔵することなくんばあらず、新渡、北の露亡
を思ひ（そもそもペルリが後来し以て幕府が已
むを得ざる迄（比のものも味あるものあると云ふ後ハ
ぬ、他年今日の事件（比なる人比なる）、比今日
を如何に比の兼ねて出来し比の事、比の事
比なる、呼ぶべきこと、疑ふべきペルリー後来の時
蘭学者や外国の事情に通じ少数の面々が
一向に驚かず却て内心之れを快とし、先を後世開
国者と云ふ意の立てると一般であらう、そうする

帝室御物の古寫經集、聖語藏より發見されし隋信行禪師の三階級に關するもの。
田中光顯伯所藏の甘露軍荼利法
燉煌石室より發見せられ、現在ロンドン大英博物館、パリ國立博物館に珍藏せらるゝ無量壽宗要經、俱舍論實義疏（印度安慧論師著）于闐志等の數十部。
俱舍論の光寶二記、唯識三箇の疏、三論疏、華嚴探玄記及び搜玄記、法華經義記、勝鬘經寶窟、金光明經疏、解深密經疏、涅槃經集解、大乘義章、閲藏知津等、佛教研究上缺くべからざるもの。
其他支那燉煌石室發見の古逸經、並に未入藏の唐代及びその以前の古德の大著全部、宋代以後の撰著中の優秀なる傑作、我國佛教開創の教主、聖德太子已來各宗の高祖、列祖の著作にして主要なるものを始め、其他の碩學高僧の名著を補入し、其數約三百部、卷數にして約二千卷を增加し、以て、根本聖典は勿論、苟も研究上主要なる聖典は史傳、寺誌、碑銘の類に至る迄をも網羅收藏して餘す所なし。

と日本の四時を比較する。(五)度々比較することとすれば或日部分の説が後の長ハガキ比較するに切なる恰うな最初西洋の文的に躍れた時も栗毛のような馬に自由平等なるとの説を能場の頃の思つたのが今日切なる長ハガキ又日記を書く行なとなるのと同じ様な深味がある。先づ角山氏無味蕪雑なる比較なれども。亦民間外交と云ふものが初めて後藤氏に伝つて試みられ、角山氏の政府を動かして居ることである。今の成績を考へると時勢の興味と争ふことの出来ぬ。六月四日池田氏又こゝに珍書畫帖を出す野口小蘇の畫帖の沒六七年頃の作品と覚しく

馬路の出る後年と同じうすく、徒に知られる人も交際を追つて殺ふべし、三帖の内雪舟山水袖帖は能を完成の設出を村瀬の出るもの筆中一の寸帖といはれたるもの

近来寸珍書畫帖の手に入るもの数種、中寸珍法帖と合せんが為めと云ふこと満人とす

六月廿日 池

同性異氣帖 草舟

題字 雲樹在社 畫 清毅堂

題字 怨尺千里 吟格 錦岡 清田

題字 種岡在社 畫 清毅堂 并汐

清芳 草舟 花 汐 二六居士

雨谷 墓林 汐 畫 吟鈴 所仙

見玉天雨 山水 畫 汐 日上 汐 江馬天江

詩 草舟 汐 一六 山水 山本半村 梅荘

吟社 蘭石 畫 一六 汐 廣瀬寺村

詩 星秋 汐 可庵 石 池田雲樹

石　望晴　志山つ人
詩　一六
梅　海四
花　
山形　霞湖
日上　恭四郎江
詩　湘烟
山形　秋雪
詩　高本黄石

山形　蘭　恭四郎江　望晴　黄石
詩　梅

童泰堤
谷鐵臣
望晴

○書画：教業珠琳閣：於て、戦汚豊法帖十六帖（箱入）を購ふ。嘉永年間、既に在世北帖菫女史寄定上版する天、菟集最も豊富、来幕の版ある和書の収めあるも北帖也。余さきに倖雲閣法帖を購ひ、今又之んを獲、幸日購ふを得さるしこの、宿渇を謝すべき歟。

倖雲閣帖第一冊首部四頁を剥ぐ。本の傷々雲本を購ふ。之を修ふ行数を換すること等同じ、唯北憶さるべく、雲本標題の字を失ふ、然れども雲本の首部と届けるもの或を取び手に入ることを思ふ、版は聊か拙の時代のしく異なるを以て之を若も之のを

以て補いんとす

○印の趣味を印界の高人解し得る極近してそれよりも書画界等能く賞賛れば、印法といふもの大体型にそつたものだけ、誰れの法しも似たり寄つたり、趣味方位も亦豪刻家も勿論、趣味を解しんを具備の人と却つて困難を感ずる、寧ろ印を兼ねる人が切つて言ひあるべし得るものの如き事多し。

北の危殆を説

しかし今日腕前のあらまほしきを左に紹介する

大体印章など多方面の鑑賞のあるものを左にいと云へる。第一金石鑑賞　第二書畫鑑賞　第三詩的鑑賞　第四工藝鑑賞　第五骨董鑑賞　第六鑑賞　如斯類別つて云ふべきことのある

印の沿革や刻法やその著のことも一切省くことにして、印の實用から進んで鑑賞的に云ふ扱ひかたを推し移つて沿革を辿ると思ふ、すべてのものが實用から始まつてそこから進んで鑑賞のものとなる、例へば日本の刀劍のごときこの種のものも刀や劍

々實用本位から云へば唯に斬れさへすればよい勿論戦闘中斬れるべきものであるけれども折れることも困る、無論耐久性の鍛錬を要する、そのうえ追々と発達して焼の味とか匂ひとか、品位とかいろいろやかましくなる、初めは裝劍のみならずドウテもよろしかつたであらうが、後は裝飾的附屬品までも美術的鑑賞と共に美術的鑑賞のみならず未だ実用誰でも知る通りである、印も同じ事で、支那の古代秦漢の頃は印を璽と云ふ、璽は位を表する意味と云ふ暗に辞令を授ける意味で、その印を刻して帶びしめたことを云ふ意味の解

中古吐嗟印を刻したる点に、個人の時代なる実用本位で、印材や鈕なども極めて素朴のものであつた。佩しこんで動章同様の大切なものであるから、重んせられた人の重んずるものである。自分名手を撰むと刻せしめたる者ひなへ、又同じ意義で材料なども選ぶことも出る。六階級から印材も體制も異なるとも得ぬ、玉や金銀なども階級の高い者の用ひ方がちがうとか、玉でこうとか、実用本位と云くなるこの装飾の意味が起つて、そうく趣味のものとなつて来る。例へば國璽とか皇帝の璽とか宦官とこうこうこのをいくら実用本位の時代ひも変

れ度の権威の印に無かつたため、随つて大きさも材も體制も殊に鈕なども堂々たる面目が無くなつたとか自分の必要から、印の素朴の時代に拙なる北斗の印が主流なるものであつた日本に存する金印四王こう印とかのが漢代の印であるが、金制で激組であるのを見ても一種の制度であつた。漢とかくべき頃なるに、すべての藝術が初稚であつたとき大きな問題で鑄金術の発達したものであること漢鏡を見て分く位なことである。豪家の貴族なことや刻法の表正のことや何千年昔にこんなものを及ばるべものである。なんとこうこう、実用本位時代と

杜と既に自然の傷つる文字の趣味も鑄金の趣味も彫刻の趣味も後世を感ずることのあるべし、既に世の物の絶ひ恰も我が刀剣の技と同じく技を養て多数にあるうちを見よ、日本あるいは弥重の二ツさくるものが支那にも押用の印を用ひ、徐氏業物は随て皆さん〳〵印の異つてみる、徐氏業物は〻〻等の印が列挙してあるが、約二十を数あるわけである、王者の印であるから、皆な六七寸角位の大きなものに扶ち玉や金銀ひあるこう、西北等の印を今日撃することを出来ないから、いつまでや乾隆帝の此の玉印を見ることうあるこん

といつまでやの騒乱に紛れて日本へ来ることが出来ず、丁寸四方位の玉流あるを玉で鈕も豪々なるものひ、純金の印霞の附随してみる、これ位牌に代はるものであるが、此等とても思半ばするくらいのもの、日本と支那と條約の取結ひをしたときの金権が五ひの調印するあると支那金権の印の違ひなるを覚し日本金権の印を以て貪婪の大刀打つ出来ないのと取入つたとの話もある位流れの支那の印の本場ひけある「追」と種々の印扶ち玉風さん、氏名印の外に海印うち多く行はれ、鈕の體制ご追化して山あや名奇自や人物や仏像ちとも必る扶ちうこと比ことが乃ち

玩味的に変化したことを今別度審しく説き諸
ゐるものあれども、およそ是れ是れ
ここでこれより五あを入りて主ら玩味に就て説ゐる
とする

一　金石玩味

支那にも金石の多い国なれば、大きな碑
を立てて種々の事を記念する習慣を古
くから有つて世界無比である。随つて金
石玩味と云ふことも早く好事家間に
起つて、拓本をとり古器を研究したり
史料を追つたりする蒐集の古代を味わつ
たりする事多く、それに次張

り日本にも移つて来て金石玩味を一流
のものとなりたるなり。そこで印を金石
の内ひも右に形のことひあり、古るいと云
（小秦漢）もあつて、それ等を研究する方法
とそれに基づく史料を補ふことを研究したり
ないし、即ち金石玩味の内に無論印も
是れと一流をなしてゐる。考古と云ふ
一種面白い玩味が印に存在することも多
く説くも及ぶまのと思ふ

一　骨董玩味

前のを研究資料として考古の材料

として何のうと云へハ實用利を主とするものゝ前に印を金石の尤も小なるものとなしかゝるの小なる所に骨董趣味のあるのみ人の珍重さん歟無きるのを常とする(百目)き机案と雖も得ざるこゝろもあるゝ若しい印ゝを出土品もの くらの古銅印を帶びたる陣殺しとなる紀念品であるからおもしろいこゝろ往々磨滅の上れの字こえ人名を刻したるものもあるゝ玉印をも風化作用も漢代あるものゝ如き時代を経て遺品の多きを欠

いそみるが、そこに装ちの味ゝあるとして骨董家に玩ばれて、骨董を元来来歴を貴ぶこゝろ一條件となるものゝが、印もまた来歴の確実なるものとなり、その人の氏名を直ちに其の来歴を語るものゝ如き文人の印章ハ珍奇なる珍奇なるもの、更に進んで其人の氏名を刻するものゝ如き文房と云へハいろ〳〵あつて時代趣味のあるゝ、文房と云へハいろ〳〵あつて時代趣味のあるゝ、印も自用の印ゝも無論其の間に加わるが、稀歟の古印を文房中の雅に推さるゝものゝある

一　書畫趣味

印は書の妙味のあることを深く説くまでも
なく、係しまんまりて云ひ漏らすことの出来
ないのも元来印を鐵業でなくしものであるが
上手の刻したものと、とごとなく和らぎ
ある所、乃ち漢印をもつて書画の
字の間に言ふ所のやうの味を含ま
んとするこんなどを漢代以来の篆刻
家がとつてあつて容易に到底
又その品位を動かしても到底
び得ない所にある、普通の金石文と
石工の手にあるものとあるが印となると鐵

人などの手をうつることはいまつて相面白
後あるものが自ら刀を握ふのびあるから、
北宋味を指すも他の金石にも多く神
采がある譯で漢魏六朝の篆字の異
味を味はんとするに印ほどよいものは
ない、尚ほ豪字を碑にするを飽り刻
してあるへ古くは刻してある金石と云へば鐘
鼎であらう、印を見て趣を異にする所
するのは、其の異なる所は鐘鼎も
可なり面白い面を彫るのであり、字の布置
なども単調でよいが、印ス面で
も方一寸四方位なおさまる
ものが多い

ハメルのであるから字の布置按排の秘訣
大切な條件である。神子[illegible]
う取れぬと全面の違り損じとる字
畫の陳腐なを消ようと配合按排
することは肝要である。金石文の
[illegible]ない苦辛印を要するとの
北禪である。要すること印面の[illegible]趣
味を感することは偶然の文字を
[illegible]すれば同じ[illegible]僅々四五
字多いところでも十字二十字位あるから
[illegible]過ぎぬ、而して其間に[illegible]神
采躍動するものであらねばならぬ。

書の趣味をもこれに託してみると云
ふべきであらう。

書の趣味：就て誰れも理解する生来が
自分と更に印の文字に面白味のあると云
ふのもある。印する畫を刻したものあ
るが、それを言へば家字畫のひとつ
故のあると云ふのである。先づ印する朱
白の刻法の違ふ、朱字と白字となる
ことは山岳陵谷に比すべく面白味の
で海波沉湖に例とすべきである。朱白
の二顆を上下に捺したる有様を山海と
俯瞰せる形貌を具する、又往々一顆の内

に朱白錯綜の刻法もあるが、これを一顆の内
に山河を具する板なるべし。凹凸の刻法のち
おのづから書画版を感するが、それのみひき
なり、元来篆字なる象形なびあることは、例へば鶴
それ自身なる画板なるものにて、例へば鶴
鶴の二字をそれぞれ鳥の形を傷へてみる
布袋の梅瓶でもそれを抱き合つて、どんう
上の下にうもつてこうする技巧の
こん等を全く画ひてある。北斗とう山との
林との木との雲との鳥との船との
この板を年近くうなる象形の文字日いく
らもある。コンナ字のある印面をもつて文字

の象形こうの印面を書版と感する強ち
勝想のかとい云へば、全体印面の字の按排
配合字の長短疎密を捨て画を心を一般
でホンのすこしもこうの不調和の感うあつて
も全局の進う按ひとなりて美をなさぬ。
恰こうも画ヌ一木一石の不釣合うあつても画う
破ぬうと同じことと、なんぞ字の按排でない
必ずしも拙を象とすりともおのづから画
趣を感する、風景を原ふんん心深緑茂叢
夏時を想いしむるこのあつ落葉飄
零秋を思ハしむるもあり、八拙を原ふんん心
荘重端正冠衣冠の人を思ハしむるも
あり

顔色酒落仙姿を思へしもあり婀娜婀娜
娜美人と比すべきものもあり全体の姿う甚
だ多様で長もあれば短もあり肥もあれば痩も
あり雄もあれば嬌もあり活潑もあれば蒼
老もあり荘重もあれば軽妙もあつて其の
刻者の精神の注ぐ所四方を印面に流露
して生氣発動し横溢おのづから
其を表する印面の豪宕な画趣あり云ふ
決して章法附会の譚ひきたるべ

一 詩的趣味

既で印文印語を見るに一種の文学
がある、氏名の印と別とも游印等多
く成語を刻する、其の成語も多くは自抱負
を寓するもの、諷刺もあり禅仏の語もあり
茶道や酒語や千差万別で往々家数の百
の文や千差万別もあり、
る上る大篇もあるが全体印を形のごと
きものもあるが、語を簡潔を欲する、簡
潔を欲する結果として古語ひも詩ひも多く
約するのが例となつて
う生ずる。詩の似て詩のあるごとく
詩らしく富む含蓄の深いものあり、詩の深
を与つて其の趣を絞つて極なるが如、印
語を刻する人を殺す的の警語の多いのと

比較である。印譜を確かに一科の文学である
僅かに二字三字及び百字を位する簡潔の
譜文を尤も高優の域の文学たる所以をこの存する
印文に趣味を感する所以をこの存する
尚ほ印文にまれて出まる印文のもとなる
い、印を欲識このあるを鈕に刻するを
例とし、昔古くは干支年月刻者の名位を
刻したるなり、近世に至つて刻する長い
欲識を刻することとなり行れて来た、冬心齋
等は専ら長篇欲を刻する、其の欲識
を捨ても書畫の題識と一般で、刻者の作
意とを抱負とを刻する時の心持とを印文

を撰ぶに所以とを、印を頼む人のもとを、
印を刻して人に與へる所以とを、其の趣向を
換へてあるが、その小品の文に一種の味
うあつて、ここに趣味を完全ること完
く書畫の題識を去ることと同しこと
である

一 工藝趣味

工藝趣味とは印材の製作に存する工の製作心
と一種の美術である、その製作とは前に
材を解する材を就てのしく言へば材を解する
多損多服ひある、玉石、金銀銅鐵、木竹、牙、陶磁、厚角
瑪瑙、玉石、

も木石も色々の種類がある、玉石も玉もあ
れば紅玉も翡翠もある、石石も凍石も黄
ハ臙石も出産地に就て種々の名のある寿
山と云ふ昌化と云ふものは産地に出る得と
名付けたる特徴にある、木石も北京種
もあれば黄楊も有る梅と云ふ扶桑木と云ふ一々
挙げることの出来ないものもある、瑪瑙や水
晶玉石も種々の別にある、又石の内に凍石
や臙石もいろ〳〵の種別にあるが一々挙げ
ることは煩はしいが、北の方の印材珠玉
も多く用ゐる石材の如き産出することも支
那に産し他国にも及ハぬ支那にのみ

文房に高遇する雅石に高人に比ひする石ハ云
で又の玉も紅晶も支那産ひとりけれ共
印材とする目こしの事未ぬ、北斗の材と
ハ刀のアタリがよいと云ふひとりにて、天然
ハの龍を得るの幸を備へてゐる、其の珍琉の
貴其燦爛たる色澤五彩目を奪ふの色
ハ何と云へぬ美のである、就中凍石と云
ふる纖緯の如いふひ品位頗る高く色
彩も種々ある、昌化石も通例雞血石と云ふて
上ひある、昌化石も通例雞血石と云ふて
るが其の斑が濃厚の血のごとくひ人受の
よいものである、臙石も白色のものもれ

何でも美ごとで牛乳の固形体を作ること曰く
である、北海道産の木材を錆絵と一金と載
せて売ると五彩人の目を眩ずるものがある、たん
ば材ばかりでも人を惹きつける味がある、
備し真の美を加工の後に発する、加工の才
一八在理を得て在り磨り浄めるの技術面
白き斑をあらはすを待つ、石材も切り板の
依つても亦アメラ美るを斑を全く失ふこと
もあるをこれ工芸的手腕を要する、加工の次
第は多く鉋を作る者の技術、材身を山のやう人
物をを落くに彫るもあるが、材の上部を種々
の形を立体的に彫ることゝ云ふ多い、例へば

物とこの為とこの牛とこの家とこの龍とこの、或る人
物羅漢、或る果物花卉、或る横綱ちびの
数を刻する北の刻刀、材の美を益々美
を加へて来る、如何の印の技味を欠く人と共
にこの之れを見て技味を感じ、ものの
ものこゝろを有する、北の鉋の彫刻と一種の技
能を要するものだ、等作の一種の風韻と雅
趣の具はらるるもの、えを欠いても文房
の具といふものあり、例へば根付ちびを巧みに
彫刻する二寸の印の鉋を彫り得るであ
らうと思ふ人もあらうが、どうも成功せぬ形
を出来ない、俗に蓋を見て風韻の伺へる

支那製の鈕を模する工手の心う学ぶ共作者の名は傳はらぬが、其模倣の心得は学ぶものを得てある、日本の工手も印の鈕をくしも印の鈕を心ずとなること出も及心す、鈕の彫刻も一流の藝ひある、名もなきと印人自身鈕を心ることこの有る、こんな印つて成功することの有るのも藝ひ技ひも熟慣ひあるうち風談がおのつから生ずるの慣ひあるうち、鑄印も同じ、ことひ、蠟型を心るる石を刻するとの日校の技能が要る、普通の鑄工の心つとのうち大弦風談う無いのひ、印人みずから蠟型を作ることうるい、鈕の製

作は工藝美術に属するが其の趣味を言い下とは、陶磁の印の製作と共に、心がとんも等の印工の名手が心つとうる多くは出来る、きて、印とても趣味を解く場ひのある、みるる印の趣味を味は無けんは成功ひもの、

學園に於ける最近の問題に就て

高田總長談

この行き違ひについて
得せしめなければなら
軍事研究團は、『我々は

然るに、その後二三日を經て、六月五日に至つて、新聞紙は突然號外を出して、政府は社會主義傾向の人に對して令狀を發して、檢擧されたものが少なくないことを報じた。續いて、學園の一二の講師がその中に入つてゐるといふ報道に接したのであつた。この日私は、永樂倶樂部の書餐會に臨んでゐたが、大學より電話が

當初は令狀を發せられた大學の講師が二人あるといふ話であつたが、結局佐野學氏一人であつたやうである。佐野氏が如何なる問題に關係し如何なる實行に携はつたかは、私共大學幹部の知らざる所であるが、要するにその外部的活動の結果、檢擧されやうとして居るものであると思ふ。

六、未だ方針を決定す

當の處置を取るのは當然であると思ふ。しかしながら、今の所では、左樣な材料も何等持たないのであるから、この所暫く尠くとも差向きは事件の眞相を研究し成行に注意する外に取るべき手段はないと考へる。

七、學園の權威を如何にせん

また、豫審判事が研究室を臨檢したといふ一事は、學園として頗る重大なる問題である。臨檢の際豫審判

成行によつて事件が極めて重大であるといふ事が證明さるゝか、或はまた、その臨檢の結果によつて、的確にして重大なる證據が擧げられたとすれば兎に角であるが、若し然らずして、或は大山鳴動して鼠一匹も出ないといふ事になり、または、學園の研究室に入つて、神聖なる研究の自由を侵してまでも、何等證據を得る所がないといふことになると、

學園に於ける最近の問題に就て

高田總長談

一、二つの問題

私の總長就任に相ひ前後して、我が早稲田大學に二つの問題が起つたのは、世間周知の事實である。この問題は盛んに新聞紙上に喧傳されたのであるから、親しくその眞相を聽くを得ぬ全國の校友其他關係の諸君は、いたく學園のために心配さるゝことゝ思ふが故に、事實の御報告旁これに關する私の感想を述べて、早稲田學報に依つて諸君の御耳に入れて置きたいと思ふ。

二、軍事研究團に關聯した問題

二つの問題の內、第一の問題は、端を軍事研究團の發團式に發したのであるが、この軍事研究團なるものは、世界大戰の實驗に鑑みて生れたものであると自分は考へた。則ち今後に於ける國家の防禦は、所謂軍人卽ち軍職にあるものと、常備、豫備、後備の兵士のみを以て足れりとしない場合がある、たとへ、稀薄なりとも、一般國民、殊に青年は、軍事的練習をして置く必要があるといふ趣意から起つたものと、自分は解釋して、その發團式に演說を賴まれた爲めに出掛けた。所が不幸にして、其の事が、學園中の一部及び世間一部の誤解を招いて、早稲田の講堂內には珍らしい妨害が起つたのであるこれ洵に歎かはしいことであるけれども、所謂行き違ひであつて、已むを得ないと思つてゐる內に、其の翌々日校庭に學生一部の集合があつて其處にまた紛擾が起り、鐵拳が飛んだといふ事實があつたそうである。茲に於て學園の一部：(勿論大多數の學生は干與しなかつたのであるが)の學生が、右と左に別れて相爭ふやうになり、隨つて、世間の問題となつたために、一時は、ちよつと險惡の狀態となつた。

三、凡べて自發的に圓滿解決

此の時、私は、選ばれて總長の椅子に就くことゝなつたから、さし向きこの行き違ひについて何とか諒解を得せしめなければならぬと思ふ間に軍事研究團は、『我々は決して不都合な事をしたつもりはないが、形式に於て聊か世間の誤解を招くやうな事があつたために、學園の平和を多少なりとも紊す虞れがあつたのは、洵に遺憾であるから、自發的に解散する』といふ意見を發表して、自ら解散した。然るに、早稲田學園に文化同盟といふ研究團があつて、これは必ずしも軍事研究團と相對してゐるものとは思はぬけれども、其處に思想問題といふものが多少絡み付いて、學生一部の間に、軍事研究團が既に自ら解散したのに、文化同盟が存立してゐる謂れがないといふ說が起りそれがため學園の平和は未だ充分に恢復されそうもなかつた。所がその場合に、文化同盟は、軍事研究團と同じく、『自分達は、文化の研究をしてゐるので、別に心に疚しき所は無いが、行き違ひのために母校の平和に多少たりとも影響のあるのは、不本意である』といふて、これまた、自發的に解散したのである

その後多少の餘波はあつたが、大體に於て學園は平和狀態となつたから、六月二日中央校庭に於て、私の總長就任式を擧ぐるに至つた。當日澁澤子爵はじめ、多數の維持員評議員教職員校友諸氏も參列せられ、學生も凡そ八千名以上來會して、近來稀なる盛況を呈した。この時、私は別項の如き演說を試みて、就任披露と共に私が學園に臨む方針に就き示す所があつた。

四、愛學園精神の實證

卽ち、其の演說中に於て、世間の所謂騷擾は、その實行き違ひに過ぎぬのであつたが、乍併、軍事研究團及び文化同盟が、何れも學園の平和を重んじ、愛校の精神によつて自ら解散したのを歡ぶ旨を述べ、學園に愛校愛學園の精神の漲つてゐる事がそれがために證明されたのを祝し更に進んで、思想問題に就ても少しばかり意見を述べ、早稲田大學は單に研究の場所のみならず、併せて教育學問の場所であるが故に、學生たるものしかも大學生である以上は、如何なる思想にも一應通曉するは決して惡いことでないと同時に、これを學ぶに順序があるといふことを忘れてはならぬ。古き思想は陳腐であり淺薄であるといふかも知れぬが、しかし實驗を經てゐる點に於て、健全である、新しき思想は、意味深長で興味も深いか知れぬが、實驗を經たものが少ないから、危險に涉ることがないとも限らぬ、かるが故に古きを學んで其次に新しきを知るといふ風に、『研究の順序』といふことがなか〳〵大切であると論じた。

また、早稲田大學は、研究の場所、また學問乃至教育の場所であるが決して實行の場所でない。隨つて學生たるものは、在學中如何なるものに就ても、實行に關與することは、その本分に違背するが故に、許すことが出來ぬ。學生は決してこの事を忘れてはならぬと述べた。

この主意は極めて淺薄かも知れずまた、說いて詳でないとも思ふけれども、一場の演說に、詳しき事を述べられぬから、極く大體のみを言ふたに過ぎぬのであるが、滿場異議なく喝采を以てこれを迎へた次第である。

さうして、軍事研究團に端を發した行違は、一掃されて、學園は全然平和が復歸したと、自分も信じ、他の人々もまた信じたやうであつた。

五、第二の問題の性質

然るに、その後二三日を經て、六月五日に至つて、新聞紙は突然號外を出して、政府は社會主義傾向の人に對して令狀を發して、檢擧されたものが少なくないことを報じた。續いて、學園の一二の講師がその中に入つてゐるといふ報道に接したのであつた。この日私は、永樂倶樂部の書餐會に臨んでゐたが、大學より電話が來て、豫審判事及檢事が大學に來て職務上大學の研究室を調べたいから許して貰いたいといふことを申出でたといふ報に接して、當時田中常務理事も校用の爲外出中であつたが、私より先きに學校に歸つて、豫審判事諸君に面會し、その結果研究室を見せることにしては如何といふ引續きの電話を受けて、私も同意したのである。茲に於て私は直ちに大學に歸り、是等の問題について尙詳しく聽き取つた。

この問題について注意しなければならぬのは、第一の問題は內輪の行違ひであるが、第二の問題は政府の社會主義に對する方針の發露とでもいふべきものに起因して性質上外部の問題であるといふ一事である。但し、その中に早稻田大學の講師佐野學氏が關係があるといふ一事がある當初は令狀を發せられた大學の講師が二人あるといふ話であつたが、結局佐野學氏一人であつたやうである佐野氏が如何なる問題に關係し如何なる實行に携はつたかは、私共大學幹部の知らざる所であるが、要するにその外部的活動の結果、檢擧されやうとして居るものであると思ふ

六、未だ方針を決定する時機でない

然し、この問題について、大學が全く無關係であるとは固より言はれないのである、少なくとも講師の一人が嫌疑を受けたに就ては關係を免れぬが、今少しく事件の進行した上でなければ、この事に對する大學の方針を定めるのは、早計であると、自分は信じてゐる。萬々が一にも佐野氏の行爲に就て、重大な犯罪があるといふやうなことでもあれば、大學は固よりこの人に對して相當の處置を取らねばならぬ。假令、裁判の結果を待たずとも、我々に於て、佐野學氏に對して處置を取るべきだけの何等かの材料を有し、我々をして然かく確信せしむるだけの種があるならば、裁判の成行如何に拘らず、相當の處置を取るのは當然であると思ふ。しかしながら、今の所では、左樣な材料も何等持たないのであるから、この所暫く尠くとも差向きは事件の眞相を研究し成行に注意する外に取るべき手段はないと考へる。

七、學園の權威を如何にせん

また、豫審判事が研究室を臨檢したといふ一事は、學園として頗る重大なる問題である。臨檢の際豫審判事諸君は、禮を厚うして許可を求めたが故に、これを許したに相違ないが、しかし、これを許さないとすれば國家の權力を以て臨むべき性質のものであるから、今日の日本の法律では、國家の權力を以て臨まるゝ以上、如何なる學園も、臨檢を拒む譯に行かぬのは、瞭かである。しかし、問題は、それで盡きてゐるとは思はぬ。卽ち、問題は、單に法律問題でなく、國家の權力に對する學園の威嚴、研究の自由といふ事を含んだ問題であると考へる。乍併、この問題は法律を超越した問題であるから、臨檢を求められた當時に、これを拒んだとて解決し難いのである。自分の觀る所では、學校の威嚴は勿論傷けられたが、しかしながら、今後の裁判の成行によつて事件が極めて重大であるといふ事が證明さるゝか、或はまた、その臨檢の結果によつて、的確にして重大なる證據が擧げられたとすれば兎に角であるが、若し然らずして、或は大山鳴動して鼠一匹も出ないといふ事になり、または、學園の研究室に入つて、神聖なる研究の自由を侵してまでも、何等證據を得る所がないといふことになると、これは、學問の神聖、研究の自由を輕率に毀損したといふ問題になつて極めて容易ならざる事件を後に殘すものと思考する。また、そうなれば、問題は獨り早稻田大學の問題のみならず、總べての大學に關係する大問題であつて、大學對司法權の最も重要なる問題を後に殘すものと考へられるのである。しかし、これも性質上右から左に解決される問題でなく且つ事件の結果によつて多少斟酌すべき性質のものであるから、我々は我が早稻田大學の少なからざる迷惑を暫時忍耐して、暫く事の成行を見るより外に、さし向き取るべき道がないと考へるのである。

以上は、私の就任の前後に於て我が學園に起つた二問題に關する概略と、及びこれに對する私の感想である。何れにしても學園のために歎かはしき事態を齎したのであつて、是等の事件に就ても學園自身頗る顧るべき點もあると思ふが、この場合は單に事實と感想の概略のみを述べて置くに止めますから不悪御承知を請ひたいのである。

一、大學研究室ノ臨檢ニ應シタルハ國法上止ムヲ得ザルガ爲ナルモ事學園ノ威嚴、研究ノ自由ニ關係ヲ

職務上大學の研究室を調べたいから許して貰いたいといふことを申出でたといふ報に接して、當時田中常務理事も校用の爲外出中であつたが、私より先きに學校に歸つて、豫審判事諸君に面會し、その結果研究室を見せることにしては如何といふ引續きの電話を受けて、私も同意したのである。茲に於て私は直ちに大學に歸り、是等の問題について尙詳しく聽き取つた。

この問題について注意しなければならぬのは、第一の問題は內輪の行違ひであるが、第二の問題は政府の社會主義に對する方針の發露とでもいふべきものに起因して性質上外部の問題であるといふ一事である。但し、その中に早稻田大學の講師佐野學氏が關係があるといふ一事がある

る時機でない

然し、この問題について、大學が全く無關係であるとは固より言はれないのである、少なくとも講師の一人が嫌疑を受けたに就ては關係を免れぬが、今少しく事件の進行した上でなければ、この事に對する大學の方針を定めるのは、早計であると、自分は信じてゐる。萬々が一にも佐野氏の行爲に就て、重大な犯罪があるといふやうなことでもあれば、大學は固よりこの人に對して相當の處置を取らねばならぬ。假令、裁判の結果を待たずとも、我々に於て、佐野學氏に對して處置を取るべきだけの何等かの材料を有し、我々をして然かく確信せしむるだけの種があるならば、裁判の成行如何に拘らず、相

事諸君は、禮を厚うして許可を求めたが故に、これを許したに相違ないが、しかし、これを許さないとすれば國家の權力を以て臨むべき性質のものであるから、今日の日本の法律では、國家の權力を以て臨まるゝ以上、如何なる學園も、臨檢を拒む譯に行かぬのは、瞭かである。しかし、問題は、それで盡きてゐるとは思はぬ。卽ち、問題は、單に法律問題でなく、國家の權力に對する學園の威嚴、研究の自由といふ事を含んだ問題であると考へる。乍併、この問題は法律を超越した問題であるから、臨檢を求められた當時に、これを拒んだとて解決し難いのである。自分の觀る所では、學校の威嚴は勿論傷けられたが、しかしながら、今後の裁判の

れは、學問の神聖、研究の自由を輕率に毀損したといふ問題になつて極めて容易ならざる事件を後に殘すものと思考する。また、そうなれば、問題は獨り早稻田大學の問題のみならず、總べての大學に關係する大問題であつて、大學對司法權の最も重要なる問題を後に殘すものと考へられるのである。しかし、これも性質上右から左に解決される問題でなく、且つ事件の結果によつて多少斟酌すべき性質のものであるから、我々は我が早稻田大學の少なからざる迷惑を暫時忍耐して、暫く事の成行を見るより外に、さし向き取るべき道はないと考へるのである。

以上は、私の就任の前後に於て、が學園に起つた二問題に關する概

一、大學研究室ノ臨檢ニ應シタルハ國法上止ムヲ得ザルガ為ナルモ事學園ノ威嚴、研究ノ自由ニ關係ヲ有スルガ故ニ事件ノ眞相ト其推移如何ニ依リ適當ノ處置ヲ執ルベシ

一、佐野講師ガ其筋ノ嫌疑ヲ蒙リタルハ遺憾ナルモ未ダ以テ事實ノ眞相ヲ確知スル能ハズ仍テ此際篤ト事件ノ眞相ヲ究メ且成行ヲ注視シ適當ノ處置ヲ執ルベシ

一、思想問題ニ對シテハ總長就任式ニ於テ述ベタル意見ノ徹底ヲ圖リ校紀ノ振肅ニ就テモ今後一層銳意努力スベシ

○右三百五拾を過ぎる四五の出を得たり補出すべき
部しなり

一蜻蛉日記解環　十八冊

板萩軒の注する所北の泥を泛するが
如解環のごとく深切なるものなれども
注者も契沖の手入本なるべきを校
正したるものなれども、此も四文
字大切なるものなれど早
くも稿れる板写の出る本なれば今も別
して嘆び難し　巻首に注者の自序
并に阿波公侯世臣の漢文の序を載
せず

一 公卿（年表）　写本　一冊

北書と談史に沖法の名を見て版刻
ちく稿に言本として行る、維横の
線内細字に人名時代を見て知し
ある表を見れば勝言も甚だ容易ならず
自分は曾て一本を得たりしも
今は如何なる婚姻を得たるか、中村博士
山花本を見て印記あり善言本に似
し傍に四拾四枚也

一 海人礼刈藻　十本　一冊

小田原蓮月の歌集にて成瀬の嵐京
三條言の上様に係る、何れの比も甚
比得難く今を珍本に属す

一 鬼貫句選　二冊

（鬼貫句選　自筆　文字屋自性寺刻）
元禄年間　享和三年　刊行の原刊本に巻後芭蕉村
の跋ある巻首に昭和三年、太祇の序
あり、跋は木版にて失せ、あとがき土で
す、北越の人今日得うたき、ものとなり
一冊

一 本朝茶経

北書往来風に出き俗書にて
待も挿入され、巻尾に茶道歌五
十首を収め、興味あるもの、書を京
の小山白嶺の著に、後本朝茶経一
名茶数往来あり、巻後の奥出

趙 樹[illegible]上木さんとなるやうな[illegible]ちがひ

一 張妙法録　寛永版　二冊

余仏[illegible]を[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]いま徒と称[illegible]を婚[illegible]

趙 張妙法の法録[illegible]を漢[illegible]ことを[illegible]

しるす[illegible]故[illegible]寛永版 高[illegible]ちがること

めでたし

一 山家集 ね　五冊

西行の集と注したるもの 此[illegible]茅しき

もしは年[illegible]ある得やすきことなる也

一 里のおじまきし　一冊

[illegible]をうきこと[illegible]ニヤリ本ン若者

か平賛源四[illegible]の文章[illegible]横全[illegible]

十二

のあるもの美物を到[illegible]旦つ花[illegible]を

[illegible]と優[illegible]とする[illegible]ちをの[illegible]列[illegible]

の[illegible]特[illegible]張[illegible]三一番を喫[illegible]ちあれ

りを流[illegible]と源四[illegible]余ニヤリ本を好

まさんと源四の若いまんこと

一 波の巻　一巻

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]を摸

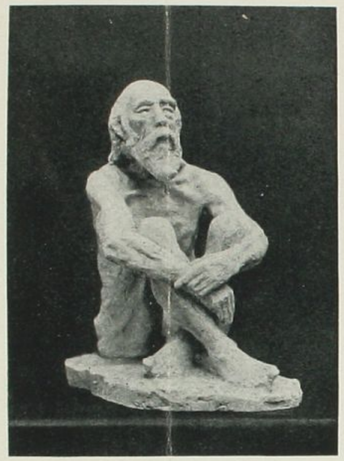
刷し[illegible]で和[illegible]とちがて[illegible]

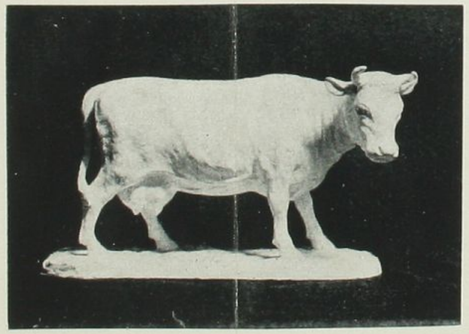
[illegible]が二[illegible]ある紙[illegible]の波の

連続してある、紙を[illegible]ちがて[illegible]

紙を用[illegible]が[illegible]上代の

美術の一班を[illegible]ことを出来





故味のあるもの明治三十五年京都の芸苑の模刻に係る、今此明を見つゝあるこゝあるこゝあるこ

○桑ノ蔵家井吳氏ニ清水ノ竹洞西山ノ賛ノ琴嚢ヲ宮玉セシ事ヲ聞ク漸ク引ク言点二枚、山易ノ賛嚢ノ表裏ニ記ス事ヲ知ル

六月十二日

世有無絃之琴今故不無無音之趣何
器絃上之音則何點花中之趣乞竹
洞畫梅而未點其音余戯著此語
為眼喫仙也也此琴自有弦則
此梅南有絃無可無趣有趣可無趣亦可可
以琴有絃有絃可
丙戌秋の許裏點五六不知

五絃之有數無數也

山陽外史

○春ごろ京兵衛の句懸を後に掛そへ
の句あり、又ひろう書きつく

六月十二日

迦四の絵に涼す
ゆうをおもひのみ見る月の月

、
古寺の皮むく桜榕の寒けも
契ふ逢夜
涸さしあふらさしつ桜ぬ釈迦
初秋
なんと秋の来ることもええん心うら
捨ようとせいて秋ということのい
らくと木の葉ふうこ紅を秋をさつ
、
行秋の捨とうるあき)句の寂
独乙の信の尾に行て
燃る火に戻うきさを念仏

人間化台如そ[illegible]ゐ[illegible]おもそ[illegible]

、

ゐそしまよ海原又生の風けるまて

こやり川叫ゐ[illegible]あをひて

元鮎の庵そ[illegible]雲やく海うな

河内のおもきひせまゐしく

いえし人ゐ

花のゐい木ゐ[illegible]る人ぞあくなら海

谷みや石ゐ家よゐ山さくら

狗子谷

海風や居宝ゐ[illegible]みちて松の声

○興福公武州玉川の古歌を出して美濃
址に碑を建てしことあれども人ゐ[illegible]ひて拓を
の文存す叫る一法帖を得たり、乃ち文拓
本日ゐ碑の表面を第三番目名ゐて左の和
歌六首を刻しあり伝し蓋歌ゐ

艾歌

多摩河泊再左良伝紋五至久利佐良
左良再奈仁勇許紋児能己許
太可大幸之伎
谷言四寸四方行也碑陰ニ度歌典ニ記
あり云

水谷玉川天下凡六在武州為其一而水道

屋移岡而莫得平井董威考索旧跡有年
近者得之清我表公書其古歌（首以勸碑
樹之於多麻郡猪方村而後古跡砕然典
貞石共亡世夫微顯闡幽春秋之志董威其
蓋亦此乎況先公之侵賜證于後世而有
餘也而以為表字
文化乙丑十二月

北の神社の碑と伝称せられし長碑あり、えんと掘る
に北神文政壬寅の洪水に河堤壊決碑亦倒
せりとあり
大正十二年十二月十書誌

○先頃の国史館員の大会に国史館デーを
定むべし国史館の標語を募集すべし決し

其方法を定むるに物と無形を選び物は
無形をひらき色の法を得たり、国史館
デーを何月何日とすべきや論ずる説を待つの
あり、或る場合設定の月日を以てすべし、或る国史
館創設の日を以てすべし、或る文庫を創
建の石上の祝日を以てすべし、重要構
造物の竣工の祝日を以てすべし、
○何等かの紀念日を設定すること
の説を何人か唱ふるのあるべ
し、何人と云へども漠然の時機を選ばんよりは
寧ろ秋冷新しき十月の初旬を可とせん、十月三日を国史館と紀
念すべき日とせんことを云へるあり

ど、ここに考量を要すべきこと第一の一日を特定するや否やの問題なり、一日に特定することを実際不便なるべし、寧ろ一週間を期とすべし、隣つてライブラリーデーと云ふす、ライブラリーウイークと呼ぶべしとの説、右の実際と便利を感ずるのみ、十月三日のみを包括して十月一日より市立ライブラリー、ウイリアムとすべしと決す

外面のみにブックデー、或るブックウイークなど日を定めて後世を奬励する例あり、北のライブラリー、ウイークも之と同しくライブラリとなるも之を後世を奬励する意味することの論あり、こんな標語の成るを待ちポスターをも作る

北の定めの日を以て全国に一斉宣伝をなすべき筈也、北のウイークに後世奬励のため都鄙の図書館を設置を思ひ、くもあるべきを聞くも可なり、講演会を開くも可なり、図書館の閲覧時刻を延長すること、図書館の陳列をなすこと、貸出しを特に許すこと、級のある作品土地の状況のため便宜行ふべし、来る出版屋をそ陳列をなすこと、北のみを特に市況を或る書物の陳列をなすこと、海賊の使利を図ることも可なり

人ありても此日のみを実行するも後世セ人これを勧むべし、平生図書を特に奬励せる人も北週間に方冊を特ふことを勧むべし、標語をなすこと

ことも ライブラリーを立てる所なり
国也 投宣伝 標榜を紹賞して募集す此
の紹賞募集も亦一種の宣伝也 国也 投場所
の柱 三十両の金を募らんとする 富士斯の
如き宣伝法を立てるを 採用を得ようと云へる
可也

服部耕石来訪 奥山金剛 に関する記

六月十七日

服部耕石来訪 次奥山金剛 に関する
金剛を後に印刷を以て世を渡り家を
以て 世を渡り家を 刑家を
花計の小説 (何篇) の家を
高井龍之 (小説) の幕末志士時代 ある人の添
を以て奥山を訪ねて しかし 其時 石五郎

う、深夜に郵を奥山に送り来れ
り、高井を微知を一言を揭げ 奥山宅を訪
へ来る 別に住を 訪ねて
奥山を出る 就て 高
用を 面会し 強きことを 義を
高井を云いしめ 依頼を受けし一枚の
状を 書くしめ 北
状を 某医家 事
高井を之を 家を
某人を訪しし 何 云
関に 待つこと 多時 往々 戸 隙 我れと 寛
ふ 誰も 何 云 関 誰も 出て来
す 解る 待ちあぐみ 後、漸々 入口へ

て生憎こゝ来内方、落井さんさうに四方を探し時を移すし住人を仰聴して終に不審に堪さるものの如く、あちこちのお伝しをめぐりて主仙なるあび無をもお招んなつて伝ることに思へんなるへと言ひ放つを、落井さんに聞くさの所為の断ることを言ひやと読み、主人も包お能つます所為状なるのあるめし無の招の此人を見ハ其様すとあり奥山う貴君を訪く感感することなり伺ひんなのお心うとなるやと思ひ落井も漸やく前日宿屋の招ける様の傲慢なるしを深く誤解を抱くこと

めることを覚り一応を洗ふとこの後落井さんの次の所を仕へて法官となる奥山八放浪した印界の人となるとなり、落井さん金剛の印界に名あるを聞きある時印の刹を訪せ人と訪問し、高きなるを此人こを往年じんを狂人と解しなる家光職きりしを、七を堤過の一変をを見る苦の感を折んなると（六月十七日誌）

耕石漆里の印材を掘りて出して示さんこを前日日三顆内を此のみを婚ひとなるものと同おなり、前日を少き海なしとなる今の家産地を少けば銚子の拾石附印砥石を

掘り出すなりと雖、石と化して出づるもの、但し
進ず掘ること深くなる隨ひ地拍後くし
無しと云ふ、成る程と樹木の化石なんとーつ
つあるものなんべ上傳のこそあるべきに云ふ
と首肯さんとす、なるほど未だなるものと信
祝するも一個所往往化して石を現めとす
北杖の切り屑を火中の投し其香を嗅
くに石炭の如き香あるを感じとす
と、此の產地は所、近き所にいつとや銑るの行きて
換換採を紙とする所なれ其は早やみ手
下まひ掘り込みの為を現めとす、銑るの
地臺を岬の一角のあり為に地圖

まうす此の為を知るを、此の採掘のなる後
を燈台不在地を將とすれ地圖し地圖
面も自ら変更せるべく、要もなき採掘う
なと一欠を為せしが、なの場所ことを乃ち
此の杖を產する所なれ知り得とす

○龍會會龍手鑑四冊きく音の字を聚む全本を
宋本なり古朝鮮本あり天文文化日の法宮本あ
り此れも所なし得難し昨の偽と唐本四冊本
を購ふ函海中のものなること明らかなり函海
百冊、無人とする業なるもうと手鑑の新たに出で
るを寧ろ幸とす、但此地もと元慶本法宮
本に及ばず、法宮本ものと本を唐本とす

亟海本と多くの異同あり、　六月十吉記

もの又御立行程三度後輯の春書は毛本目録（一巻六冊）を始め此方也と

称（巻六冊）と云原書の雅目録を始め此方也と

刻本なり、得たりと雖も宮本なり、紫釘

合田本架中に置くべし

○廬山記三冊元禄の刊本也首部と蓮社の

図花千一あり、廬山の地誌二冊末巻影印之

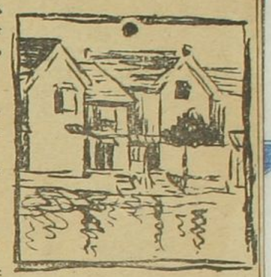
を収む、北也今甚だ得難し　此年蓮社祭

古編を始め架中に　之年、之れと共に攻を要

すべき今は検出のいとまなし

(毎月二回 新聞紙一日発行) (大正八年十一月八日 第三種郵便物認可)

禁酒の日本



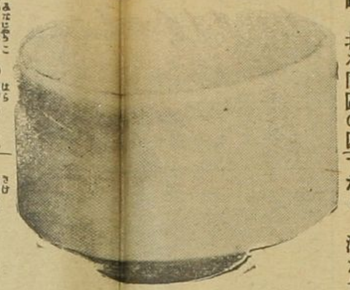
下戸の建てぬ藏

蠻我樓主人

下世話に「下戸の建てたる藏はなし」といふが、あれは新川にの五文字を冠して、初めて句をなし、意味も通ずるのだとの說がある。

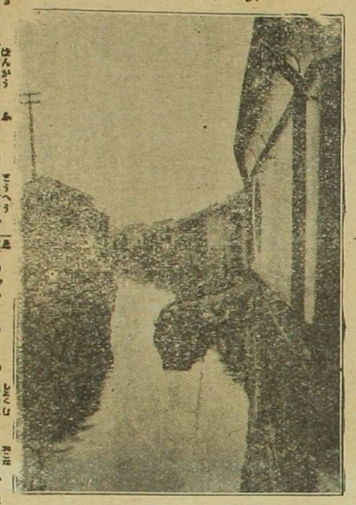
新川は元來洲崎行きの電車通り、靈巖島停留場から、一丁程南に入つた所にある、小さな堀川の名であるが、その兩岸の地域をも、新堀と稱して居たのである。（今は堀の南を京橋區銀町、北を同區の四日市町と改稱されて居る。）此邊は酒問屋が軒を接し、川端に立並んで居るのは何れも酒藏で、其中一戸でも下戸の建てたるものはなく、皆上戸の拵つた、酒代で出來て居るから、前の說には根據がある。

この新川の酒問屋組合では三月に一度位小賣酒屋の主人連を招いて、唎酒競技會を催すことを、此頃新聞紙上で讀んだ。唎酒競技會を行ふには檜板の上に、ざらりと大形の杯が數十個列らぶ。



酒はもとより有害であるから、是れを口にすれば、舌先の受附即ち味覺神經か文句をは云つて、奥へ通すまいとするので、うまく飲めぬ。此の忠實なる受附の目を掠める樣に造つたのが、うまく飲める杯なのだ。斯くまでして、造化の警告に背き、强て飲酒を續けて居る中には、受附も大抵劣等と相場がきまつて居ると、問屋の番頭が話した。さもあるべし、呑兵衛連、平素の酒に舌の先の味覺神經が麻痺して居るから、香味の鑑別が出來ようはづがない。」唎酒に用ひる杯は周圍がまつたてゝ、底の平たい特製のものだ。何故その樣な形のものを使用するかといふに、色の鑑別に便なるばかりでなく、酒が先づ舌先に觸れるからだ。酒の呑みがうまく飲めると稱する杯は是れと反對に、酒が成るべく舌の先に觸れぬ樣に飲むこの出來る形のものでなければならぬ。

新川の町



杯には番號を附し、投票で香味判定の優劣を定めるのであるが、一等賞を得るのは、平素酒を好まぬ者で、呑兵衛は酒の杯も効力がなくなるのである。

酒を禁ずる日

○自分の家で禁酒を少なからう者ひ込んで酒をのやめると云ふ謎を掛けんうおかしいとて、新川の堀や花の國やきき酒の杯をそう國してあるのが義と必つて、記事を禁酒宣傳を主とする者だが、どつちつかずを取る、自分を上戸の建てた花や酒杯の國ようと堀を懷しい、江戸の名所を今をいくらも存ずるぬかり丸花北堀

りをいつ迄も傳くべき名所なれ、きき酒を用ゐる特殊の杯も初めて國とせんとて、禁酒新聞を見新聞の新聞なり、却つて云へる面白い國を得ど、所謂糟を敲く藉るの類び、一日天を禁じ得ぬ

六月十八日梅雨濕を晩雨の後記す

○目の編纂中の山陽氏より紹介山陽の詩評を求めと乞し五峯と賛すもの五峯流も先の文を評するの稿を寄せ来る、余の五峯と示せるものこんなのあるまと思ひ、其の小品文を評する一段を云こう云ふ合するものあり、即ち上下を云う下をこゝに掲す

山陽の本領

外史政治のめきめきたる多少の異議あり論説にもつてゝ正と重たるもの才識力量共に他に抜群なり

本書にもつて大きたること

といの人り異議あり

だが 雑文に於ては一筆格に

下る 今、[illegible]遊[illegible]に就て之を知

[illegible]

[illegible]の如きあり百合侍[illegible]推し[illegible]代

[illegible]沢上[illegible]お伝[illegible]の[illegible]

北倫を深けで極め[illegible]覚るにつらんどの[illegible]

[illegible]たオ[illegible]

仏[illegible]として甚だ相[illegible]ら[illegible]心地がする

墨一筆生の[illegible]力を併せに[illegible]

他の[illegible]

甚だ[illegible]

名[illegible]一[illegible]を雲煙[illegible]たオ陽だけん

[illegible]の作品に[illegible]才思[illegible]、拙筆の書に

溢れ、どこか人と異つたものがあり殊に

[illegible]品に[illegible]一種[illegible]の[illegible]、[illegible]

他人の金及し[illegible]いんがあ[illegible]元年日

[illegible]の学者に真面目に研究

研究[illegible]人未[illegible]の[illegible]

（この跋文はたしかに彼の）

叙記論第の跋は

幸彼の作品に人にかうして上るものも

の少くないが題跋の部にあるものを

觀るべきものは

ものである然るに山陽に

あるの跋文が最いのみか其書後跋

（所謂喉嚥珠を含むよりも）

跋四卷のうちに彼の二篇黄題跋と

爲行すにそなはけの如き見へ我

邦にそなへ[illegible]

できるものである

大オをもつて山陽をかの

注疏に没頭して

たことは世性の

かの才の別名に学力が足い

研究文学のめきもつまでいく

第等の文を作にも根據を

家の学に至がすオのみをへて行く

叙記論

作る者

よりて易に工みで自然に学問を受れぬ山陽の彩文に就くべきよ少いのは[illegible]

刻去鍛錬の至らざるばかりでなく[illegible]

[illegible]ことしこに由よりてあるが少なく必ずしも学力を為さぬ成ること簡単に成べく信永の味を有たせるよ[illegible]の

が[illegible]かく寧ろオに待つ所が多い殊に山陽と一種の神解を有しめるに

[illegible]高藤一たび山陽の手に入れば容易に裁断される其一例を挙げんば

経を治むるに不必注視注の[illegible]文視注[illegible]且

六経の[illegible]旁諸先秦古書の[illegible]其[illegible]言[illegible]

然後還看六経。向之詰屈聱牙者の将

近及而解。諸家注疏。概属[illegible]夫経

[illegible]あり。亦文而已耳といひ或は易卜筮

を書せ。苟可以卜筮三矣。此説理。已[illegible]

[illegible]義矣といふが如き（千百歳清儒）

護す技術手段と（僅々あ言を以て千百の議論を一掃し去る式）

[illegible]あらか此れ

亦た一箇の人識である。又た攻撃論難に出でたるに揚げ足を取るための名人である。
過ぎ虚を撃つに妙を得てゐる例である。
栗山潛峰の保建大記に山神璽宝劍内侍鏡所在為定儀といへるは駁し。別
假使璽劍持神璽宝劍内侍鏡来。
誠亦為皇統也といひ武を者[illegible]
并[illegible]論一儒生の孟子を考證し某言は論語
に基づき某語を神記に基づくと[illegible]
を列記[illegible]を笑ひ何ぞ不[illegible]乳子[illegible]所

[illegible]遥御文王周公[illegible]所[illegible]。但[illegible]至於
伏羲一畫[illegible]後[illegible]見[illegible]の御[illegible]といふ了
がめき説の為[illegible]姑らく措き妙諦顧
を解き寸鉄人を殺すのあり此[illegible]
[illegible]を[illegible]於[illegible]論[illegible]よ高山
[illegible]麻姑の痒を搔くがめくて
軽快[illegible]
[illegible]
[illegible]と[illegible]

古書蒐集趣味の人々

古玩生

▼古書蒐集趣味の人は、東京だけでもなかなか少なくない。蒐め方はいろいろあつて、或は漢籍一方といふ人もあれば、和書一方の人もある。或は醫書詩文集、繪類似のやはらかいもの、又は法律制度に關したかたいものばかりを集めて居る人もある。

▼そのうちで、何でも御座れ、何でも珍本であれば結構といふのが文學博士狩野享吉氏である。狩野氏は先年の藏書を荒井泰治氏の手を經て東北大學に讓つたが、その後また澤山にあつめてゐた。これは數學の本があるかと思ふと繪に類するものがある。和漢ものがあるかと思へば、日本の古版ものもある。多々益々辨ずるといふ有樣だ。

▼狩野氏はその後蒐めたものも近頃石本惠吉男の手でそれ〴〵拂かれたさうだが、も一度位は蒐められることと思ふ。兎も角もその道にかけては、えらい一人である。

▼米食と脚氣の歷史的研究で醫學博士になつた岡崎桂一郎氏は、變り物として通つた人であるが、此の人も古くから蒐め、人の氣のつかぬ時から手をつけて居る有數な蒐書家である。何れかと言へば專門の醫書が多いが、必ずしも專門のものゝみにとどまらず、あらゆる方面のものが手に入つてゐるようだ。

▼岡崎氏の藏書が澤山榮養研究所の參考品として陳列せられてあるが、食物關係の古書では氏以上のものはあるまいといふことだ。そのうちの『病源候論』などは推古天皇時代のもので、眼のことが書いてあるので、河本博士など日本中を探したが、探し出さなかつたといふことだ。

▼同じ推古時代の古書で『千金法』といふのが陳列せられてある。これは德川幕府時代に出版せられたものもあるが、推古時代の本としては此外にないといふ珍書である。其外和氣清麿の子の廣世が平安朝時代に書いた『藥經大素』だとか、足利時代竹田昭慶といふ人が書いた自筆の『延壽類要』など日本で初めて書かれた藥養書で、支那で『本草綱目』が書かれた時より五十年前に既に日本人かこれに手をつけてゐたといふ珍らしい本である。

▼向井元升の『庖厨大和本草』も面白く、武藏石寶自筆本草綱目註釋』の如きは稀世の珍本で、白井光太郎博士などの推奬措かざるものである。西洋の種痘に先だつこと二十年前、我日本に於て秋月の人方春朝に依つて眞內法の發見せられてゐることなど日本人の爲め氣を吐くに足るものが少なくない。

▼同じ醫學博士の土肥慶藏氏なども蒐書熱心家の一人で、この人は專ら日本人の作つた詩文集を蒐めて居られる。博士の鬱軒文庫には必ずしも詩文集のみとは限られないが、日本人の作つた詩文集は殆んど網羅して居るといふ本職の度膚科以外この方にかけても大家である。

▼富士川游氏なども蒐書家として知られてゐる一人で、三萬卷ばかり光年京都大學に寄附したが、日本醫學史の研究に必要な資料として蒐めたものがなかなか多い。蒐書の方面は日本醫學史の研究家としての立場から、自然岡崎桂一郎氏と同じ傾向を取つて居るようである。

▼最近に蒐めだして、一氣呵成に大家になつたのは先達て亡くなつた和田維四郎氏である。この人は自分が金持で、自分のうしろに岩崎と、久原とがあつた。和田氏の手をとほして三方に行つた譯だ。それであるから鬱の如き勢で買つて買つて買ひまくつた。そして最近數年のうちに、和田氏自身も有力なる珍書所藏家になつた。殊に此の人は蒐集家としての素養のある人で、系統だつて集める。集めたものは又系統をたてる。事がチヤンと科學的に進んでゆくといふ行方であつた。和田氏はしきりと光悅本を集めてゐたが、光悅本の『徒然草』か一册足らなかつた。ところがその本をもつてゐる者があるといふので、それを買ひたいといふと五百圓でなくては賣れないといふので、早速五百圓で買取つたが、その本はその人がタツた五圓で手に入れたものであつた。かく苟もその欲する本は値段を構はず買つて、息を引取るまで書物のことを言つて死んだといふに見ても熱心の程度知るべしである。

▼なかなか熱心で、蒐めることにも一種の見識をもつて居る人に林若吉氏がある。この人は書物にかけては眼が肥えてゐて、また熱心でもある。この人のもつて居るもので最も珍らしいのは宮省なる『基督の模範』といふ本で、これは日本に於ける耶蘇教の初期に於て、即ち慶長頃九州で出版したものである。その本を林氏が手に入れた。これは滅前にあつたが餘程深く仕舞ひ込まれてあつて、いろいろなものがあつた。聖母マリアの前にともした蠟燭の燃え殘りまで殘つてゐた。それが氏の手に入つてゐる。その本のローマ字綴りになつて出版されたものが長崎縣大浦の天王堂にあるが、氏のは日本の假名に書いて活字になつて居る、非常な珍本である。さういふ譯でなかなかその方では有名な人である。

▼德富蘇峯氏も長い間の讀書癖で、此の人のは讀書癖がもとになつて藏書癖になつて來た譯だ。德富氏の藏書中には西洋の珍書も可なりにある。ことに歷史に興味をもつて居られるから、日本及び支那その他東洋に關する古い書つても最近の丈手筋は二代目安田藏次郎氏で、氏の松廼家文庫は日本ものの軟派にかけてはたいしたものだ。安田氏は必らずしも軟派に限らない、力にまかせてドシドシ買つてゐるから、近き將來にはたいしたものになるらう。

▼關西方面にも此の趣味の人は多い。個人としては文學博士內藤湖南氏の如き、好きでもあり、いゝものももつて居る。五山文學ものに就ては上村觀光氏がなか〳〵の大家で、あらゆる五山文學の書物は大概一度はこの人の手を經ないものはない。

▼小說家の渡邊霞亭氏も、日本の軟文學に就ては藏書家であつたが、此の頃感ずるところあつて讀渡されたといふ評判だ。早稻田方面では市島謙吉氏が、この道にかけては苦勞した人で、近頃は小さい巾箱本(豆本)を蒐めることに大變熱心であるといふ噂を聞くが、兎も角苦勞した人である。

▼書物の値段は、他の書籍骨董に比して尙著しく安い。ことに今より數十年前までは非常に安いものであつたが、段〴〵せり上げて今では高くなつて來た。舊い頃の藏書家として知られた野村素介、木村巨擘、向山黃村などがたいへんところである。

▼氏はまた五山版と稱せらるる足利時代に出來た日本の古い出版物なども多く所藏し、その方にかけては群を拔いで多いといふ評判だ。それから支那及び朝鮮の書物も、讀書家であるが爲に隨分いいものをもつて居られる。世間の噂では十萬卷といふが、五割減にしても五萬卷で兎も角藏書家としては矢張り有數の藏書家であるらしい。青山分會に一萬卷以上のものを殘してあるが、それでも青山から大森の書庫に藏書を運搬するに數臺の馬車で五六日を要したといふことだ。

▼更に部分的に言へば、專門的に集めて居る人が可なりに多い。法學博士穗積陳重氏の如きは『貞永式目』といふものを集めて居るが、既に蒐まつて居るいろ〳〵な種類の貞永式目が七百餘種にのぼり、一生のうちには千種を越すであらうと言ふ評判だ。

▼文學博士佐々木信綱氏は萬葉集に關するものを初めとして、その外和歌に關する方面に就てはなかなか手廣く集められてゐるようだ。しかし何と言つても最近の丈手筋は二代目安田藏次郎氏で、氏の松廼家文庫は日本ものの軟派にかけてはたいしたものだ。安田氏は必らずしも軟派に限らない、力にまかせてドシドシ買つてゐるから、近き將來にはたいしたものになるらう。

▼關西方面にも此の趣味の人は多い。個人としては文學博士內藤湖南氏の如き、好きでもあり、いゝものももつて居る。五山文學ものに就ては上村觀光氏がなか〳〵の大家で、あらゆる五山文學の書物は大概一度はこの人の手を經ないものはない。

▼小說家の渡邊霞亭氏も、日本の軟文學に就ては藏書家であつたが、此の頃感ずるところあつて讀渡されたといふ評判だ。早稻田方面では市島謙吉氏が、この道にかけては苦勞した人で、近頃は小さい巾箱本(豆本)を蒐めることに大變熱心であるといふ噂を聞くが、兎も角苦勞した人である。

▼書物の値段は、他の書籍骨董に比して尙著しく安い。ことに今より數十年前までは非常に安いものであつたが、段〴〵せり上げて今では高くなつて來た。舊い頃の藏書家として知られた野村素介、木村巨擘、向山黃村などもつて居られるこの點は他人の企及しがたいところである。

▼氏はまた五山版と稱せらるる足利時代に出來た日本の古い出版物なども多く所藏し、その方にかけては群を拔いで多いといふ評判だ。それから支那及び朝鮮の書物も、讀書家であるが爲に隨分いいものをもつて居られる。世間の噂では十萬卷といふが、五割減にしても五萬卷で兎も角藏書家としては矢張り有數の藏書家であるらしい。青山分會に一萬卷以上のものを殘してあるが、それでも青山から大森の書庫に藏書を運搬するに數臺の馬車で五六日を要したといふことだ。

▼更に部分的に言へば、專門的に集めて居る人が可なりに多い。法學博士穗積陳重氏の如きは『貞永式目』といふものを集めて居るが、既に蒐まつて居るいろ〳〵な種類の貞永式目が七百餘種にのぼり、一生のうちには千種を越すであらうと言ふ評判だ。

▼文學博士佐々木信綱氏は萬葉集に關するものを初めとして、その外和歌に關する方面に就てはなかなか手廣く集められてゐるようだ。しかし何と言つても最近の丈手筋は二代目安田藏次郎氏で、氏の松廼家文庫は日本ものの軟派にかけてはたいしたものだ。安田氏は必らずしも軟派に限らない、力にまかせてドシドシ買つてゐるから、近き將來にはたいしたものになるらう。

▼關西方面にも此の趣味の人は多い。個人としては文學博士內藤湖南氏の如き、好きでもあり、いゝものももつて居る。五山文學ものに就ては上村觀光氏がなか〳〵の大家で、あらゆる五山文學の書物は大概一度はこの人の手を經ないものはない。

▼小說家の渡邊霞亭氏も、日本の軟文學に就ては藏書家であつたが、此の頃感ずるところあつて讀渡されたといふ評判だ。早稻田方面では市島謙吉氏が、この道にかけては苦勞した人で、近頃は小さい巾箱本(豆本)を蒐めることに大變熱心であるといふ噂を聞くが、兎も角苦勞した人である。

▼書物の値段は、他の書籍骨董に比して尙著しく安い。ことに今より數十年前までは非常に安いものであつたが、段〴〵せり上げて今では高くなつて來た。舊い頃の藏書家として知られた野村素介、木村巨擘、向山黃村などいふ老人が集めた頃は、隨分い〻本が安くよく集まつたものださうな。

▼日本の本を初めて價値を出させたのは、支那公使の黎汝昌、公使館隨員楊守敬などで、さう云ふ連中が日本のい〻本を集めかけたので、値が出たが、それでもまだ、たいしたものではなかつた。近頃はものが少なく欲する人が多く、物價騰貴といふが、古書の値段ほど多く騰貴したものはない。少なくとも十倍、多ければ百倍騰貴したものも珍らしくはない。これまでは根氣よく本屋をあされば安くてい〻本が見つかつたが、今日では本屋の眼もなか〳〵肥え、書物が少ない。い〻本は滅もほしいで値段が高くなる。

▼從來金持では岩崎、久原、安田といふところであつたが、最近では三井一家がまた始めたので、益々本の値段は高くなる一方で、普通の本まで昇格して珍本になつてゆくといふ譯だ。今日では貧乏者では到底古い本は買へぬ。堀り出し物も絕無ではないが僅有だ。しかし書籍と違つてまだ世の中に書物を愛する人の數は少ないから、世間を歩くうちにはい〻ものに出遇はないとも限らない。

○京橋住白井の考古の金石考古圖集を發刊して世に日本古代の金石類を世に公表のプレートとなし快と入つてゐる、北海御支廳橋藏

[illegible]も北圖集の廿九集を始めとし、こんな

[illegible]我々の手元に收めてある、重々乙の乙

[illegible]寺の什器と称する西藏

[illegible]彦神社の寶器と西藏

[illegible]郡峯寺の金仏寺の什器とそれである、越後

[illegible]多くの金石類を無いのそれ

もコンナ句会又追々越後藏を出しつけ

[illegible]大いに參考とする、偶々大正

[illegible]の本月號

[illegible]の古川南

涯の麻筒記を載せてゐる、北麻筒記

麻筒記

南涯　古川郁　越後

越後彌彦神社多藏寶器。而宋製青磁香爐爲最。我青海神社亦藏麻筒一串。家君命郁記之。相傳延享七年新發田藩主溝口公詣社。憂其狹小傾圮。命普請奉行羽田某。拓地營築。而有老杉圍二丈許。根柢盤結。不可以爲基。乃掘之遇石函。函中有甕。開蓋則有銅製麻筒。又探之獲麻數十。面刻倉持宗吉菅原氏治承二年六月廿四日十六字。某恐懼弗措。獻諸公。公恐其褻瀆。遂獻諸神社云。文政中。白河樂翁公遣侍臣打搨。收載于集古十種。明治革新。車駕北巡。抵加茂驛。岩倉右大臣供諸叡覽。因有金幣之賜。謹案神社祀椎根津彦命。方神武帝東征。迎皇師於速吸之門。嚮導

翼衛。自難波入河內。轉抵大和。賊勢猖獗。皇軍不利。命及衣敝蓑
裝老嫗。採埴於天香山之頂。作八十平瓮。以祭天神國神。遂一舉
殲賊。以肇皇國無窮之丕基。我神社實列延喜祀典。享朝廷崇褒。
藩主尊敬歷世弗渝。與彌彥神社俱爲北越崇祠。嗚呼亦可謂盛
矣。夫麻筒之爲物。供獻幣之用者也。菅原氏事蹟未詳。鄭重埋藏
以防其褻瀆。則其敬神崇祖之誠可知也。且治承二年距今殆八
百餘年。滄桑變遷。神社寶器不傳者不可勝數。唯此麻筒與神社
終始。儼然以至今日。豈知非神助邪。我家世承祠宰。奉禋祀者數
百載。爲吾裔孫者維誠維一。祭享無怠。則明神降鑒。福祉無極。與
麻筒比其隆。可期也已。麻筒高八寸二分。經一尺八釐。上豐下殺。

微有壞蝕。而制造古樸。翡翠欲滴。叩之鏗然有聲。及作二重桐函
而藏之。謹記其事由。以貽于後昆云。（勺水曰。記一麻筒。以及敬神之誠。傳後世子孫崇奉無懈。可謂忠厚之至。）

加茂の古神社の寶物として集古十種に
も收めてあるが、その未だ世に出でざる
ものである。麻の納めある筒を開くと
稱するものである。誠に考古圖集に比べ
あるべきを撿するに未だ無し。北斗も遠くに
べき數、世後の考古家に寄すべきもの
元平の威那王の圖形畫畫もまた世後
金石の最古最上のものである。余の家に拓本
一卷あり

六月　日記

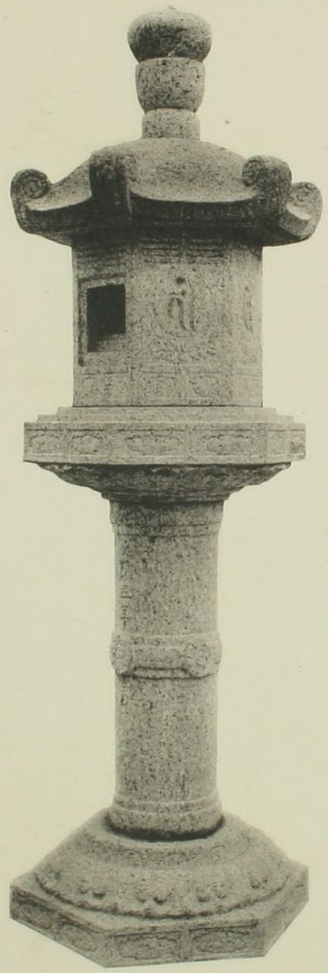
石燈籠全景

○高橋義雄が護国寺境内に古式の燈籠二十基を撰して供養したることは前号に詳しく紹介せり今左の四の図を掲ぐ、北二十基の燈籠は名物として各寺院に現存し茶家の珍とせらるるものなり工芸上参考とするべきものなり、此図冊を発行するに当りて敬侯の雲水、朱房と資を投ずるあるに依り容易に捜索し得たるを以て幸とせり

般若寺形

奈良般若寺文珠堂前に在り大塔宮此寺に匿れて危難を免れ給ひしに依り其佛助に報はんが爲め之を寄進せられたりと云ひ傳ふ

多武峯形

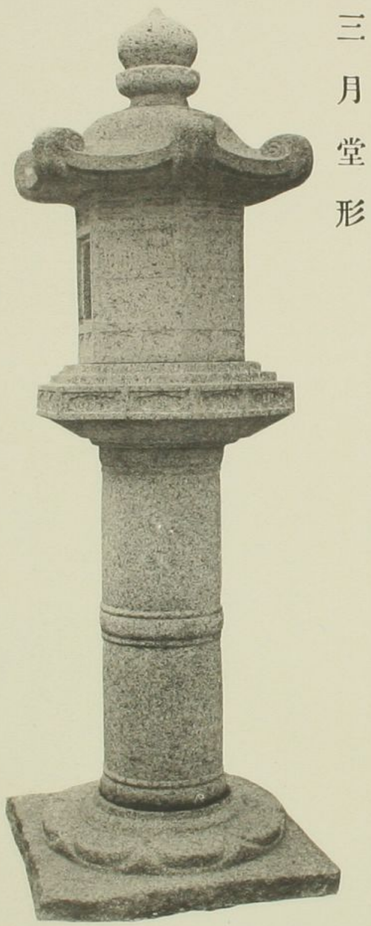


大和國多武峯談山神社に在り後醍醐天皇吉野行在の頃、屢々同社に京都還幸の御祈願があつて此石燈籠を御寄進あらせらると云ふ

元興寺形

元奈良元興寺に在り世に啼燈籠の名あり延元年間の刻造なり延享の頃京都の人下村某寺僧に請ひて持歸りしに夜毎に南都に歸りたしと啼聲を發するを以て再び元興寺に返納したりと云ふ明治の初年にも亦大阪に持行かれたる事ありしが是れも暫時にして又奈良に復歸し今は京都帝室博物館構内に保留せらる

三月堂形



東大寺法華堂即ち三月堂前に在り建長六年十月十五日の刻造にして別に法華堂形とも云ふ

榮山寺形

大和國宇智郡榮山寺に在り此寺は養老年間藤原武智麿の建造に係り本石燈籠も其時造られたる者なりと云ひ傳ふ當寺が音無瀬川に臨むを以て此燈籠を別に音無瀬形とも云ふ

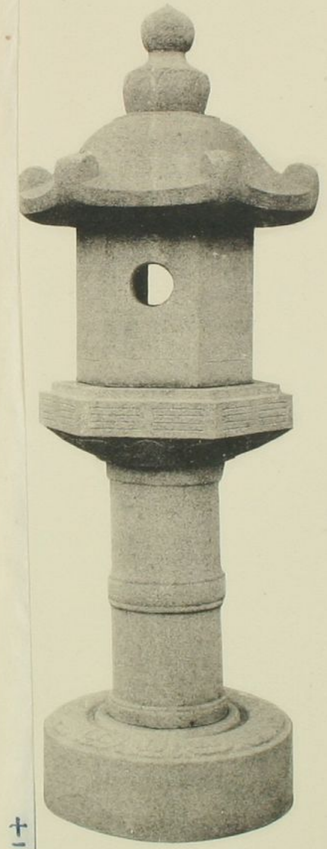
蟬丸形

近江國逢坂山關口神社境内に在り當地は『これやこの行くもかへるも』と云へる歌を以て有名なる蟬丸の遁居したる處なりと云ひ傳へ此關口神社は實に蟬丸を祀れる者なりと云ふ而して此石燈籠を一名逢坂形とも云ふ

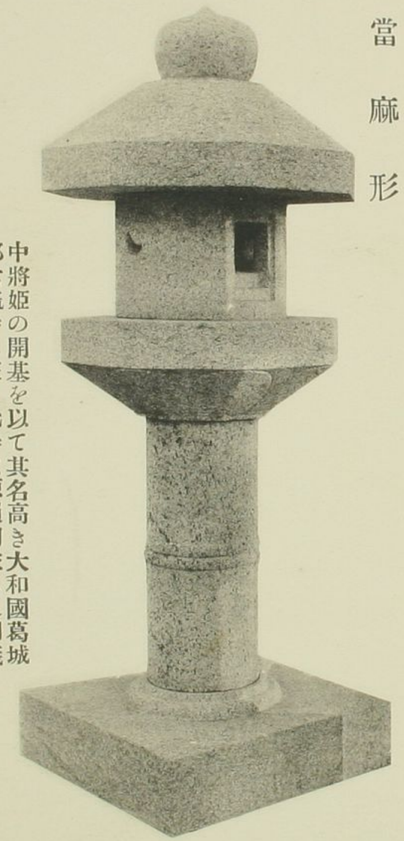
燈明寺形

山城國相樂郡加茂村燈明寺に在り傳へ云ふ藤原藤房の寄附なりと

太秦形



當麻形



山城國洛西太秦寺太子堂前に在り上宮太子の建設せられたる者と云ひ傳ふれども其實は藤原時代の物にして榮山寺形と共に本邦最古の石燈籠なり

中將姫の開基を以て其名高き大和國葛城郡當麻寺に在り此寺は源頼朝並に足利義滿の歸依篤く此石燈籠は即ち義滿の獻納したる者なりと云ふ

西之屋形

春日神社の境内に在る三屋の一なる西の屋の舍前に在るを以て此名あり

平等院形

山城國宇治平等院鳳凰堂前に在り石質は茶臼石又は宇治石と云ひて頗る堅牢なる者なり

法華寺形

元奈良市外法華寺書院の庭に在り此寺は光明皇后の建造にして火袋に彫りたる佛像は天平式なり而して其形の華奢なる恰も美人の立姿の如し明治三十年頃此燈籠と共に同庭に鼎立して居りたる鶴龜兩石をも箒庵が讓受けて今猶ほ東京赤坂伽藍洞に保留せり

八幡形

南都東大寺の鎮守手向山八幡宮に在り文治二年僧勇精奉納の銘あり

柚之木形

奈良春日神社境内に在り崇德天皇保延三年攝政藤原忠通の寄進なり大和第一の大祭たる春日若宮祭は忠通が時の飢饉を憂ひて行ひ始めたるものにして其時此燈籠を柚の木の下に据えたるを以て此名ありと云ふ

奥之院形

春日神社奥の院祠前に在り中臺に十二支を刻す世に春日燈籠と云ふ

道明寺形

河内國道明寺天滿宮に在り康元年間の刻造なり元筑紫太宰府天滿宮にありしを領主黑田侯の庭園に移され其後大阪の商人某が貸金の代りとして同地に持歸りしに或る時天滿宮の夢想に感じて之を道明寺天滿宮境内に納めたりと云ひ傳ふ

飛鳥形

崇峻朝の古刹大和國高市郡飛鳥の法興寺に現存す

秡戸形

春日神社秡戸の祠前に在るに因て此名あり
栂の尾の明恵上人が獻納せし者なりと云ひ
傳ふ

蓮華寺形

山城國洛北大原野蓮華寺に在り

雲卜形

奈良春日神社に在り延享五年薩摩の人雲卜之を刻造す
雲卜は半醉と號し元祿中大佛殿再建に當り奈良に來り
て中ノ川に居り後春日山中深川に移住す名物燈籠中時
代最も若き者なれども名作を以て世に稱せらる